

令和4年度

研究集録

ひとりひとりをみつめて



香川県立香川西部養護学校

研究集録

第44集



巻 頭 言

研究集録「ひとりひとりをみつめて」は、今回で第44集となります。開校から44年。つまり、開校以来毎年発刊されており、本校の研究、教育実践の歴史が脈々と受け継がれています。来年度から校名を「香川西部支援学校」と変更しますが、今後も研究は続いています。タイトルである「ひとりひとりをみつめて」は、本校の教育方針の文言の中にも使われています。時代とともに教育方針は変遷してきましたが、この文言は開校以来途切れることなく続いており、本校が大切にしてきた原点であると感じています。

もう一つ、本校の研究において大切にしてきたことは授業です。研究授業はもちろん、日々の授業がとても充実していると自負しています。ねらいを明確にして取り組む授業であるからこそ、子どもたちは変容し、教員の専門性も高まっていると感じています。本校では、各部各学年1回の研究授業を行い、そのうちの一つは全校研究授業として全教員で授業討議を行っています。また、9月には、相互参観週間を2週間設け、他学部の日々の授業をお互いに参観する機会を設けています。このような授業を中心とした取組が、教員同士の専門性や同僚性を高め合い、学校全体の系統性につながっていると感じています。

今年度は、全校研究テーマ「自立と確かな学びの定着を目指した授業づくり」のもと、各部でテーマを設定して研究に取り組みました。この集録を読み進めるに当たって、特に次の2点に着目してもらいたいと思います。1点目は授業の記録です。主体的・対話的で深い学びの実現や、授業での学びを実際の生活につなぐための教師の意図的な場面設定や児童生徒の変容などについて記しています。2点目は研究の成果をまとめた資料です。「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」の視点で、各部で整理しまとめた研究の成果物です。本校でも、各部で取り組んだ成果を学校全体に広げていきたいと考えています。この集録を読んでいただいた多くの方々にも、参考にしていただけたら幸いです。

学習指導要領では、新しい時代に必要となる資質・能力の育成として、「生きて働く知識・技能の習得」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養」の三つが挙げられています。これから先、さらに予測困難な時代を生きていく子どもたちに、様々な課題の解決に向けてこれまで学んできたことをもとに、自ら考え、自ら行動する力をいかに育成するか、今後の大きな課題であると感じています。

子どもたちを取り巻く環境はこれからも大きく変わっていくことでしょう。時代の流れや変化に敏感に対応しながらも、今後も主役である子どもたち一人一人を見つめた指導・支援が充実するよう研鑽を積んでまいります。今後とも本校の教育にご指導、ご協力を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

校 長 大西 祥弘

目 次

巻頭言

全校研究テーマについて	1
-------------------	---

小学部

1 テーマについて	3
2 研究方法	3
3 実践	5
(1) 第1学年	
(2) 第2学年	
(3) 第3学年	
(4) 第4学年	
(5) 第5学年	
(6) 第6学年	
4 まとめ	17
〈参考文献・研究推進者〉	19

中学部

1 テーマについて	20
2 研究のねらい	20
3 研究の内容	21
4 研究の方法	21

5 授業実践		22
(1)第1学年(数学)		
(2)第2学年(理科)		
(3)第3学年(生活単元学習)		
生活単元学習指導案		
(4)授業実践のまとめ		
6 まとめ		35
資料1～5		
＜参考文献・研究推進者＞		42
高等部		
1 テーマについて		43
2 研究方法		44
3 実践		45
(1)第1学年(保健体育)		
(2)第2学年(生活単元学習)		
(3)第3学年(職業)		
4 まとめ		48
＜参考文献・研究推進者＞		54
校内研究を振り返って		55

編集後記

全校研究テーマについて

Ⅰ 全校研究テーマ「自立と確かな学びの定着を目指した授業づくり」

令和3年1月の中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」では、急激に変化する時代のなかで子どもたちに育むべき資質・能力として「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう」にすることが必要であると示されている。また、これらの資質・能力を育むためには、新学習指導要領の着実な実施が重要であるとされている。

昨年度設定された上記のテーマは、本校のグランドデザインの実現を目指したものである。児童生徒の「これまで」と「今」を未来につなぐという意味の「自立」と、自ら考え自ら学ぶことで一人一人の学びを確かなものにしようという意味の「確かな学びの定着」を二つの柱として設定している。研究の具体的内容としては、新学習指導要領の本格実施に合わせ、小学部、中学部、高等部の三つの部がそれぞれの課題から全校研究テーマに関連するテーマを設定し、これまでと同様に研究授業を中心とした実践研究を進めることとした。各部の研究の取組は各部の指導目標を踏まえて行うとともに、取組の成果を全校で共有することで三つの部の取組に連続性をもたせた研究になるようにする。

2 研究の方法

(1) 各部の研究テーマ

全校テーマを受けた各部の研究テーマは以下である。

- 小学部 主体的・対話的で深い学びを目指して～体育科における授業実践～
- 中学部 年間指導計画の再検討 ～年間指導計画の作成過程改善の試み(2)～
- 高等部 年間指導内容(計画)についての検討(3)

(2) 各部で共通する研究方法

各部の研究の進め方はそれぞれの章で説明するが、共通して以下の方法をとる。

- ① 各部の重点目標の実現を目指した取組とする。
- ② 各学年 1 回ずつの研究授業と討議会または事前模擬授業を研究の中心に置き、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」について、全教員が授業づくりや協議に関わる。
- ③ 指導助言者として香川大学教育学部坂井聡教授を招き、研究計画への助言や、中学部 3 年の研究授業及び研究討議会(全体研修)での指導助言を受ける。

なお、研究成果を部を超えて共有できるよう、研究集録をまとめるとともに、全校に周知し活用できるための資料化にも取り組む。

(3) 大まかな年間スケジュール

4月 研究計画について研究部員より各部会で説明

5月 全体研修「今年度の校内研究について」

① 全校の研究計画 ②各部の研究計画 ③校内研修等の年間計画

7月～12月 各学年1回ずつの研究授業、討議会等を各部毎に順次実施

学年等	教科等	単元・題材
小1年	体育	玉入れゲームをしよう
小2年	体育	サーキット運動
小3年	体育	ボール運動をしよう
小4年	体育	カラーマットダンス
小5年	体育	サーキット運動
小6年	体育	でんしゃでゴー！（サーキット運動）
中1年	数学	時刻を正しく読もう
中2年	理科	空気についてしらべよう
中3年	生活単元学習	みんなで行こう！修学旅行 Part2 ※全校研究授業
高1・2・3年2組	保健体育	ボッチャ
高2年	生活単元学習	おもてなしをしよう～秋祭り～
高3年	職業	卒業後の働く生活を支える社会の仕組み

10月 中学部3年で全体研究授業 ※香川大学坂井教授による参観指導

11月 全体研究授業の討議会 ※ // 指導・助言

12月～1月 各部研究のまとめと、研究集録原稿の作成

3月 研究集録の印刷、製本、送付

小学部

研究テーマ

主体的・対話的で深い学びを目指して

～体育科における授業実践～



本校スクールキャラクター

ゆめちゃん(上)、みらいちゃん(下)

1 テーマについて

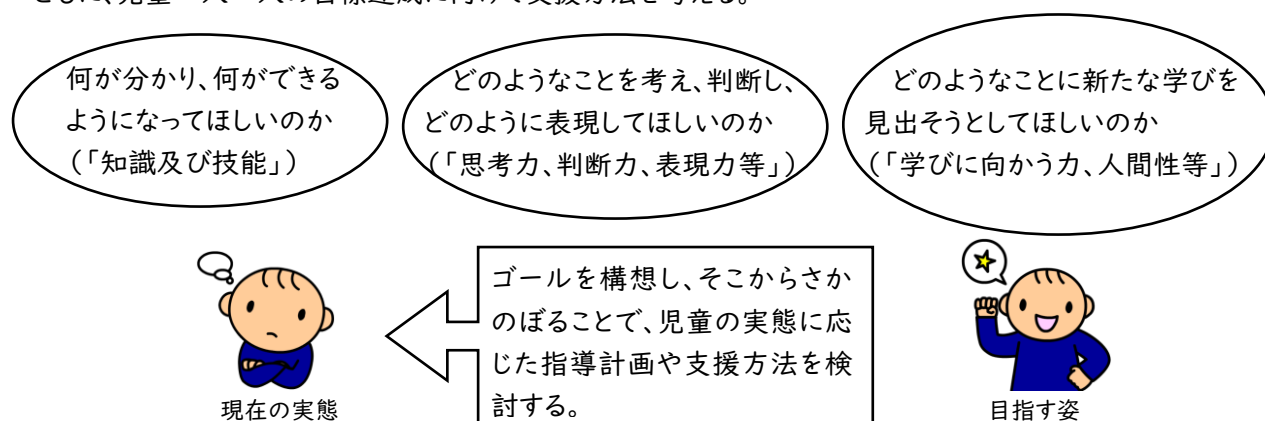
昨年度より、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、授業実践を通じた研究を進めてきた。副題を「『どのように学ぶか』に焦点を当てた授業づくり」とし、音楽科、図画工作科、生活単元学習について研究授業を実施した。事前模擬授業や討議会では「主体的な学びグループ」「対話的な学びグループ」「深い学びグループ」に分かれ、それぞれの学びにつなげるための支援の工夫について活発な意見交換が行われた。3グループで協議をしたことで、授業の内容を細分化して考えることができたという意見が多かったが、その一方で「深い学び」についての協議が難しかったという意見もあった。「主体的な学び」「対話的な学び」に比べ、「深い学び」という言葉にイメージがもちにくいことが理由の一つであると思われる。また、これまでの研究で生活単元学習やことば・かずについては深めてきたが、体育科の研究に取り組むことは少なかった。

そこで今年度は、引き続き「主体的・対話的で深い学びを目指して」を研究テーマとし、副題を「体育科における授業実践」とする。本校小学部の児童の肥満率が比較的高いこと、運動量の確保が不十分であること、体の使い方が苦手な児童が多いことなどを踏まえ、指導計画の見直しや授業改善に取り組む。体育科における授業実践を通し、児童が運動の楽しさに気づき、他者との対話を通して考えを広め、運動への思考を深められるような授業づくりに努めたい。また、学習指導要領に示されている体育科の目標や内容に照らし、観点ごとに適切な評価を行うことで、指導と評価の一体化を図る。

2 研究方法

(1) 指導計画の見直し

単元の終わりに目指す児童の姿を描き、全体を見通した計画を立てる。体育科の内容は、「A 体づくり運動系」「B 器械運動系」「C 陸上運動系」「D 水泳運動系」「E ボール運動系」「F 表現運動系」「G 保健」の六つの運動領域と一つの保健領域で構成されている。第1段階では、体を動かす遊びを通して運動の楽しさや喜びを味わったり、簡単な合図や指示を理解して運動したりすることなどが大切であるとされている。また第2段階では、徐々に少ない支援で運動できるようになったり、簡単なきまりを守りながら友達と楽しく運動したりすることなどが大切であると示されている。第3段階では、これまで獲得した技能や知識を状況に合わせて活用しながら運動したり、考えたことや気付いたことを他者に伝えたりすることなどを旨とされている。このことを踏まえ、学級の実態を考慮しながら単元設定を行うとともに、児童一人一人の目標達成に向けて支援方法を考える。



(2) 授業改善

次の視点を踏まえて授業改善を行う。昨年度に引き続き、6回の研究授業、2回の事前模擬授業、4回の討議会を実施し、「主体的な学び」の視点、「対話的な学び」の視点、「深い学び」の視点で意見交換を行う。

【主体的な学び】

運動の楽しさや健康の意義等を発見し、運動や健康についての興味や関心を高め、課題の解決に向けて粘り強く自ら取り組み、それを考察するとともに学習を振り返り、課題を修正したり新たな課題を設定したりするなどの主体的な学びを促すこと。主体的に学習に取り組めるよう児童が見通しを立てたり振り返ったりして、自分の学びや変容を自覚できる場面をどこに設定するか。

【対話的な学び】

運動や健康についての課題の解決に向けて、児童が他者（書物等を含む）との対話を通して、自己の思考を広げ深め、課題の解決を目指して学習に取り組むなどの対話的な学びを促すこと。対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面をどこに設定するか。

【深い学び】

習得・活用・探求という学びの過程を通して、自他の運動や健康についての課題を発見し、解決に向けて試行錯誤を重ねながら、思考を深め、よりよく解決するための深い学びを促すこと。学びの深まりを作り出すために、児童が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか。

(3) 学習評価

評価の3観点のうち、「知識」と「思考・判断・表現」については、指導から期間を置かずに評価を行う。「知識」については、活動や発表の様子、つぶやきなどを観察して具体的に捉える。「思考・判断」の評価では、児童がどんな点に気を付けて活動し、どんな気付きや思考の深まりが見られたのかで見取る。「表現」については、思考し判断したことを他者（友達や教師）にどのように伝えたかを評価する。また、「技能」と「主体的に学習に取り組む態度」については、一定の学習期間及び評価期間を設けることが必要である。「技能」では、指導した技能の内容についてどの程度動きが高まったのかという児童の伸びを評価する。「技能」の評価をする際には、「知識」の獲得が不十分なために運動の仕方が分からないのか、「知識」は獲得しているものの「技能」の獲得に課題があるのかなど、「知識」と「技能」を関連付けて評価を行う。「主体的に学習に取り組む態度」の評価では、指導内容と評価規準を明確に設定し、「～しようとしているか」という観点でその態度がどの程度身に付いたかを評価する。

(4) 各学年のまとめ

事前模擬授業、討議会、授業改善シートの意見をもとに、各学年で「主体的な学び」の視点、「対話的な学び」の視点、「深い学び」の視点で単元計画や授業を考察し、成果や課題をまとめる。また、実践した指導や支援のなかで、「主体的・対話的で深い学び」につながったといえる具体例とともに、運動面での児童の伸びが顕著であった指導内容、支援方法などについてもまとめ、来年度以降の指導に生かせるようにする。

※主体的・対話的で深い学びの実現を目指して授業改善を進めるに当たり、特に「深い学び」の視点に関して、各教科等の学びの深まりの鍵となるのが「見方・考え方」である。各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方である「見方・考え方」は、新しい知識及び技能を既にもっている知識及び技能と結び付けながら社会の中で生きて働くものとして習得したり、思考力、判断力、表現力等を豊かなものとし、社会や世界にどのように関わるかの視座を形成したりするために重要なものであり、習得・活用・探求という学びの過程の中で働かせることを通じて、より質の高い深い学びにつなげることが重要である。（学習指導要領解説 総則編より）

※「体育や保健の見方・考え方」の「体育の見方・考え方」については、生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する観点を踏まえ、「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自分の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」としている。（学習指導要領解説 各教科等編より）

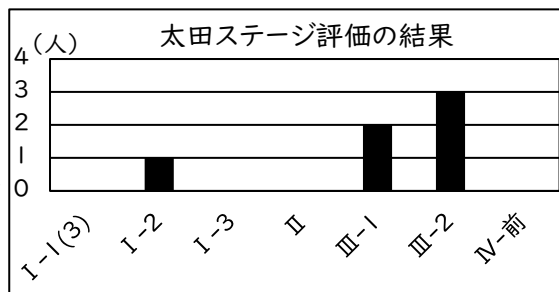
3 実践

(1) 小学部第1学年 体育科

① 単元名「玉入れゲームをしよう」

② 児童の実態

学習態勢に関しては、そのときの気持ちに左右される児童や気になることがあると落ち着いて参加することが難しい児童、集中して取り組み続けることが難しい児童など、実態は様々である。一方で、支援の程度は異なるものの、どの児童も体を動かすことが好きであり、ボール運動では目標物に向かってボールを投げることができる。また、友達への意識が芽生えてきた児童が多く、名前を呼んだり休み時間に一緒に遊んだりすることが増えてきた。



③ 単元設定の理由と主なねらい

玉入れは、籠の中に玉を入れるという分かりやすい活動でありながら、力加減や物との距離感覚、協調運動など、日常生活に必要な様々な力を身に付けることができる。また、入った玉の数を競うという競技的な要素があり、楽しみながら活動することができる。本単元では、通常の玉入れゲーム、不安定な足場で行う玉入れゲーム、動く籠を狙う玉入れゲームの三つに取り組むことで、体幹を鍛えたり体をコントロールする力や体力を身に付けたりすることができると考えた。また、単元の最後には全員で一斉に玉を投げて玉入れゲームを行うことで、他の団体競技や運動会での競技につながることを期待できる。本学年の児童は1年生であるため、楽しみながら日常生活に必要な力を養いつつ、勝敗や簡単なきまりを守る経験を積み重ねたいと考え、本単元を設定した。

④ 実際の授業の様子

ア「主体的な学び」の場面

道具の準備では、床に貼られた写真カードを手掛かりにして、児童が自分で三角コーンを置くことができていた(写真1)。また、活動する順番を児童自身が選ぶようにしたことで、1番にやりたい児童は意欲的に活動でき、自信をもちづらい児童は友達の様子を見てから安心して取り組んでいたと考える。玉入れゲームでは、テレビに示したタイマーや音楽を見聞きして30秒間活動することができた(写真2)。タイマーを見て自分で残り時間を確認し、急いで投げる児童の姿も見られた。

イ「対話的な学び」の場面

活動の最初に「応援する」というポイントを示したことで、同じチームの友達が活動している様子を見て、応援できるようになった児童がいた。また、自分が玉を投げ終わると一緒に投げた相手チームの籠を見に行き、入った玉の数を見比べる児童の姿も見られた。チーム対抗でのゲームを設定したことで、さらに友達を意識できるようになってきたと考える。授業の最後には、二つの活動のポイントのうち、頑張った方を発表する時間を設けたことで、自分の活動を振り返ったり教師や友達から認められたりする経験を積み重ねることができた(写真3)。

ウ「深い学び」の場面

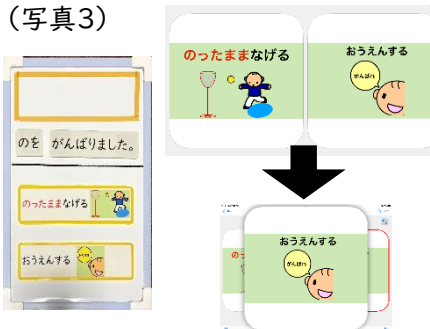
不安定な足場で行う玉入れゲームでは、最初は体の前にあるバーを持ったり教師が背中や腕を支えたりしておかないと、アジリティディスクに乗ったまま玉を拾ったり投げたりすることが難しい児童がいた。しかし、回数を重ねると一人でバランスを保ち、最後までアジリティディスクに乗ったまま取り組めるようになった(写真4)。

⑤ まとめ(成果と課題)

単元を通して3種類の玉入れゲームや投げる練習に取り組んだことで、最初は、投げた玉が籠を大きく越えたり、なかなか届かなかったりした児童も、籠をよく見て力加減を調節したり、遠くの籠まで届くよう膝や肘を曲げて体を構えたり、籠の位置に合わせて腕の高さや体の位置を変えて投げたりすることができるようになってきた。活動する順番を決める際は、自分の希望する順番ではなくても受け入れられるようにするため、同じ順番でやりたい児童がいた場合はじゃんけんで決めるようにした。繰り返し取り組んだことで、自分の思いとは異なる順番になっても気持ちに折り合いを付け、最後まで活動することができるようになった児童もいた。発表では、実際に活動している自分の様子を動画や写真などで確認しながら振り返れるようにしておく、自分の活動と頑張ったこととをつなげやすく、さらに深い学びにつながったのではないかと考える。自分の活動を振り返って発表することは本単元が初めてのことであった。「次はこうしよう。」と自分で考えたり友達の良いところに気付いたりするきっかけになるよう、今後も振り返りの活動を取り入れていきたい。

(写真1) 	三角コーンを置く場所に同じ物の写真を貼り、目印になるようにした。教師がその都度言葉掛けをしなくても児童が自分で確認し、コーンを置くことができた。
---	---

(写真2) 	学校生活のなかで視覚支援タイマーを用いて活動時間を伝えることが多いため、同じように視覚支援タイマーをテレビに大きく示し、30秒間が視覚的に分かるようにした。同じ時間分の音楽も流し、活動に見通しをもちながら競技のわくわく感を味わえるようにした。
--	--

(写真3) 	言葉で伝えられる児童には「～のをがんばりました。」という文字や二つのポイントが書かれたカードをボードに貼り、発表の手掛かりとなるようにした。言葉で伝えることが難しい児童はタブレット端末のアプリケーション「Drop Talk VPP」を用いて発表できるようにした。二つのうち一つのイラストをタップするとそのイラストが拡大され、音声が出るよう設定した。タブレット端末の画面はテレビに反映させ、待機している児童も視覚的に分かるようにした。
--	---

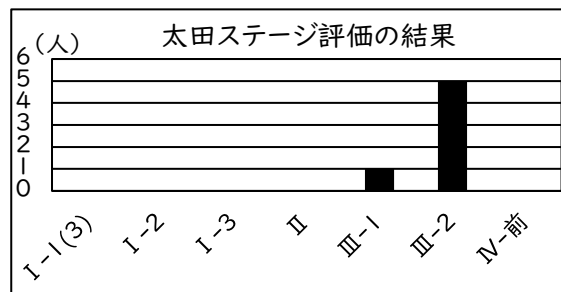
(写真4) 	教師の支援なしではアジリティディスクに乗って玉入れをすることが難しかった児童が、一人でアジリティディスクに乗り、玉を投げている様子である。繰り返し取り組むことで体の使い方に慣れ、膝を曲げたり腕を広げたりと自分で工夫してバランスを保つことができるようになった。
--	--

(2) 小学部第2学年 体育科

① 単元名「サーキット運動」

② 児童の実態

学習指導要領に示されている学習内容の段階では、第1段階2名と第2段階4名である。どの児童も体を動かすことが好きで、簡単な動きであれば手本をまねることができる。しかし、大きく体を動かすことが苦手だったり、慣れない姿勢に抵抗を示したりする児童もあり、実態は様々である。友達の様子を見る児童は少ないが、教師の言葉掛けを聞いて友達の活動に注目することができるようになっている。



③ 単元設定の理由と主なねらい

サーキット運動は幾つかの用具を組み合わせでバランス、筋力、柔軟性などの体の使い方を学習していくなかで、生活に必要な基本的な動きを身に付けることができる。周回しながら連続して動くので体力も身に付く。また、スモールステップで難易度を少しずつ上げることでもできる。繰り返しの活動は、失敗してもまたすぐに自分の順番が来て、成功体験をする機会が多くなり、できたことへの喜びや楽しさを感じながら、遊び感覚で進んで体を動かす習慣が身に付くと考えられる。友達の様子を見ることによって動きの見通しをもったり、友達を意識したりすることにつながると共に、小集団のなかで順番や決まりを守って活動することの大切さを知る機会にもなると考え、本単元を設定した。

④ 実際の授業の様子

ア「主体的な学び」の場面

色分けしたミニフープをつないだ教材を使って、集合や移動を自発的に行うことができるようにした(写真1)。マット運動では、タブレット端末を使って自分がしたい動きを選択することにより、意欲をもって取り組むことができた(写真2)。サーキット運動の準備と片付けを友達や教師と一緒にすることで、役割を果たす経験ができた(写真3)。

イ「対話的な学び」の場面

正しい動きを身に付けるために3か所にそれぞれ教師が立ち、必要に応じて言葉掛けをしたり手本を示したりした。正しい動きができたならその場ですぐに教師から称賛されることで達成感を味わうことができ、さらに楽しく動きを身に付けることにもつながった(写真4)。

ウ「深い学び」の場面

振り返りをするために、毎回授業の最後にタブレット端末を使って楽しかった動きを一つ選んで発表した。また、単元の途中で動画を見ながら振り返りをする時間を設定した。教師が具体的によかった点や頑張った点などを伝えて称賛することで、次回への意欲につなげることができた(写真5)。

⑤ まとめ(成果と課題)

活動を繰り返すうちに自分で分かって動いたり、小集団のなかでのルールを理解して積極的に活動に取り組んだりすることができるようになった。用具の難易度が上がっても積極的に挑戦し、技術的にも向上した。今後も用具の種類や数を増やしながらかつさまざまな動きを身に付ける活動を設定したい。

(写真1)



集合のときには、笛の合図を聞いて自分のシンボルカラーのミニフープまで走り、その中に立つルールを学習することで、集合や移動を自発的に行うことができた。サーキット運動では、先頭の児童が活動を始めたときに左へ一つずつ移動するという決まりに従って繰り返すと、順番を意識するようになり、言葉掛けがなくても交替ができるようになった。

(写真2)



タブレット端末の画面に提示された三つの絵のなかから自分がしたい動きを一つ選び、その絵に触れるとそれだけが大きく表示されるようにした。選んだ物はテレビ画面に反映させて待機している児童も見ることができるようにした。その絵から動きをイメージして楽しく取り組んだり、苦手な動きにも挑戦したりするようになった。

(写真3)



使用する用具の準備と片付けを3グループに分けて行った。ホワイトボードにグループごとの顔写真と用具の写真を貼って視覚的に分かりやすくした。毎回行うことで、用具の場所をだまかに覚えて少しの援助でできることも増えた。友達や教師と一緒に協力して最後まで行うことで、自己有用感を高めることができた。

(写真4)



繰り返しのなかで難易度を上げやすいように、跳ぶ活動に低ハードル、回る活動にマット、またいだりくぐったりする活動にプレイランドギアを用いた。手本を見せたり、「ぴよんぴよん。」「ころころ。」など動きがイメージできるような言葉掛けをしたりした。それぞれの教師が即座に称賛したり、改善点について言葉掛けをしたりすることで、正しく動けるようになり、難易度を上げててもできることが増えた。

(写真5)



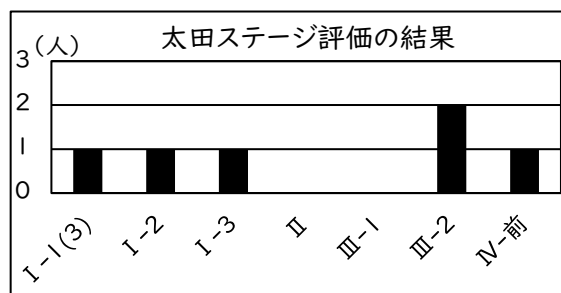
タブレット端末の画面で楽しかった活動を選び、一人ずつ前に出て発表をした。また、自分の動きを確認できるように、撮影した動画を見た。教師から具体的な評価と称賛をもらい、さらに友達からの拍手を受けることで「できたこと」を実感し、満足感や達成感を味わうことができた。

(3) 小学部第3学年 体育科

① 単元名「ボール運動をしよう」

② 児童の実態

どの児童も体を動かすことが好きで、自由に走ったり、動いたりすることは好んで積極的に行う。その一方で、ボディイメージをもって体を動かすこと、姿勢を一定時間保持すること、緩急をつけながら落ち着いて動くことは苦手な者が多い。ボールに関しては、どの児童も興味関心があり、転がす、投げる、乗る、跳ねる様子を見るなど様々な方法で楽しんでいる。



③ 単元設定の理由と主なねらい

本単元ではボールを使った「渡す、投げる、バランスを取る」の3種類の簡単な運動に取り組んだ。「渡す」では、相手との距離感や受け渡しの力加減を知ること、「投げる」では、全身を操作すること、ボールを使って「バランスを取る」では、体を支える力を身に付けることができたり、児童それぞれが、ボールを使った楽しい、得意、と感じる運動を見付けたりできる。また、簡単な決まりやボールの操作のポイントを設けることで、楽しみながら決まりを守ろうとする姿勢を育てたり、課題を解決するためにどうすべきか考える姿を引き出したりすることができると考え、本単元を設定した。

④ 実際の授業の様子

ア 「主体的な学び」の場面

児童それぞれが楽しい、得意、と感じるボール運動を見付け、進んで体を動かすことができるように、1時間の授業の中で全く違った動きを取り入れた3種類の簡単なボール運動を設定した。各運動のコーナーを決まった場所に設置し、一つずつ順に取り組んでいくようにすることや、一つ一つの運動時間を短くすることで、見通しをもち、最後の運動まで意欲を持続させながら取り組むことができた。コーナー間の移動は音楽を合図に行うことで、教師からの指示を減らすことができた(写真1)。各コーナーには「頑張ること」を写真や絵と文字で提示し、取り組む際に自分で確認できるようにした(写真2)。

イ 「対話的な学び」の場面

順番を待つ場面では、「応援しよう。」「〇〇さん、頑張れ。」とそばにいる教師が言葉掛けをして、友達の様子に注目し、応援する姿勢を促した。授業を重ねるにつれて、「頑張れ。」や「すごいね。」「あと少し。」などと友達の活動する姿を見て自発的に応援する場面が増えた。動画での振り返りは、自分がテレビに映るという期待感もあり、どの児童もテレビ画面に注目していた。授業開始時に挙げた「頑張ること」に焦点を当て評価を行うことで、できたことや、良かった点、頑張っている点を分かりやすく伝えることができた。また、教師からの評価だけではなく、友達同士で良い点にも気づき、「〇〇さんの足はどう。」の教師からの問い掛けに「前だね。」や「ピンポン、ピンポン。」とできていることを伝えたり、「上手だね。」と称賛したりする姿が見られた(写真3)。

ウ 「深い学び」の場面

積み重ねてきた経験を基に児童自ら次のステップに向かえるよう、「投げる」運動では的までの距離を、「バランス」運動ではバランスを取る姿勢を選択制にして、自分で難易度を選べるようにした(写真4)。「前の時間は〇色から上手に投げたね。」といった、過去の取組を振り返るきっかけを作れるような言葉掛けを行った。

⑤ まとめ(成果と課題)

本単元では、ボール運動が「できた、できなかった」の結果だけではなく、課題に向かう姿勢や、自分で考える姿勢といった結果に至るまでの過程を十分に評価したいと考えた。そこで、主体的に取り組むための環境の構造化や運動のポイントの明確化、動画での振り返りと、その結果を次に生かすための課題の選択制といった点を特に意識して授業を組み立てた。その結果、課題を完璧にやり遂げられなくても、ポイントを意識できたことや、自分で選んだ少し難しい課題に最後まで取り組めたことに達成感を感じ、満足そうな表情をする児童がいた。その一方で、確実に成功することでの満足感を得るために、一番簡単な課題から抜け出せない児童もいた。このような児童に対して、次のステップに導くことができるような教材の工夫や教師、友達との関わりからの促しなどについて考えていかなければならなかった。また、本学級は在籍する児童の実態差が大きい。どの児童も、自分のもつ力や、思いを表出しながら取り組める授業づくりについて、今後も考えていきたい。

(写真 1)



3種類のボール運動と、歩く、またぐなどの基礎的な運動を組み合わせ、サーキット形式に取り組んでいくようにした。移動するときには、一列に並ぶことや、追い抜かないこと、友達にぶつからないことをイメージしやすいよう、フープをつなげたものを電車に見立て、並んで移動した。移動の間は電車に関する音楽を流し、音楽が流れる間だけ進むようにした。安全上全員のフープをつなぐことは難しかったが、決まりを守り一列に並んで進むことができるようになった。

(写真 2)



3種類それぞれの運動のポイントを「頑張ること」とし、写真や絵と文字で示し、コーナーごとに提示した(①)。テレビのイラストカードを、各コーナーに設置された「頑張ること」を示したボードに貼ることで、本時の目標を意識しながら取り組むことができるようにした(②)。振り返りの際、「今日は何をテレビで見るの。」と尋ねると「投げる。」や「足。」などと返答があり、目標を理解した上で活動に向かうことができていたことが分かった。

(写真 3)



「投げる」の振り返りでは、投げる瞬間を一時停止して、「頑張ること」の写真と見比べながら評価をした。動画で見る、手本と見比べることで「できた」を分かりやすく示すことができた。客観的に自分の姿を見て動きのイメージをもちやすくなったことや繰り返し取り組んだことで、肘を上げる動きを習得し、飛距離が伸びた児童もいた。

(写真 4)



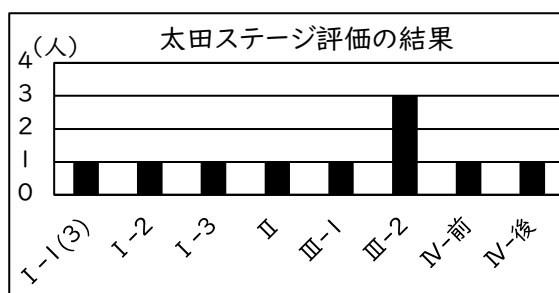
的までの距離を 1m ごと(2~5m まで)に、色の違うバランス平均台を置き、選択できるようにした。投げるときには、バランス平均台をまたぐよう指導をすることで、足を前に踏み出す動きを引き出せるようにした。教師が直接体に触れることなく、自然と足を前に出す姿勢を取ることができる児童が増えた。

(4) 小学部第4学年 体育科

① 単元名「カラーマットダンス」

② 児童の実態

本学級には10名の児童が在籍している。そのうち2名は肢体不自由を併せ有し、視覚的にも支援が必要な児童である。運動技能については、高ばい、片足立ちなどの基礎的な粗大運動ができる児童から、教師の支援や言葉掛けを受けて運動に取り組む児童、身体的な支援を受けながら、可動域の範囲で体を動かす児童まで、実態は様々である。



③ 単元設定の理由と主なねらい

本単元では、これまでに身に付けてきた運動技能を連続的に発揮できるよう、マット上やマット間を移動しながら様々な粗大運動に取り組む「カラーマットダンス」を行う。5色のマットを使用し、5人という小集団で活動することで、小集団のなかでの指示理解や、友達の動きに合わせようとする協調性を養うことができる。同じ色のマットを前後に配置することで、後ろ向きに進むという動きを取り入れることができ、前進するときとは違う体の使い方を学ぶことができる。リズムカルな音楽とともに体を動かしたり、隣の友達と一緒に活動したりすることで、前向きに運動に取り組もうとする態度が育つことが期待できる。以上の理由から本単元を設定した。

④ 実際の授業の様子

ア「主体的な学び」の場面

児童になじみの深いシンボルカラーのマット(写真1)を使用することで、色を手掛かりにしてどこに立つか、どこを目指して歩くかが分かり、自分で動ける児童が多かった。ダンスでは、動きの手本と簡単な記号やイラストの指示をテレビに映した(写真2)。言葉の指示で動ける児童、手本をまねて動ける児童、イラストをヒントに動ける児童など実態は幅広いが、ほとんどの児童がどんな動きをするのか分かってダンスに取り組むことができていた。

イ「対話的な学び」の場面

5人でダンスに取り組むことで、友達のことを意識することができ、隣の友達と歩く速さを合わせるよう気を付けながら運動できた児童もいた。活動をしている児童も見学をしている児童も意欲的に活動に参加できるよう、見学の児童には事前に上手にできている人を探すよう言葉を掛け、ダンスが終わった後に発表する機会を設けた。友達に褒められてうれしそうにする児童が多く、意欲につながったように感じる。

ウ「深い学び」の場面

事前に運動のポイントを伝えることで、どのように体を動かせばよいのか、どこを頑張ればよいのかを意識して活動に取り組むことができていた(写真3)。高ばいで後ろ向きに進む、高ばいや後ろ歩きで低ハードルをまたぎ越すなど、今までに身に付けてきた運動技能を発展させて習得することができた(写真4)。その場で足踏みをするのが苦手な児童が多かったが、手本や言葉掛けを見聞きしながら徐々に足踏みを意識できるようになり、カラーマットダンスをしている間、マット上で足踏みを続けることができる児童が増えた。本単元では、児童の実態に合わせて様々な運動を取り入れることができ、マットの間に低ハードルを置くことでさらに運動を発展させることができた。今後は低ハードルをボディステップやプレイランドギアなどの別の器具に変えることで、運動の幅を広げることにつなげていきたい。

⑤ まとめ（成果と課題）

本単元は、肢体不自由を併せ有する児童と一緒に活動に参加することを前提に、他の児童たちが今まで身に付けてきた運動技能を発展させることができるよう活動を設定した。音楽に合わせて体を動かす活動は、どの児童も意欲的に参加し、後ろ向きに進む様々な運動を習得したことで、どの児童もボディイメージが育った。肢体不自由を併せ有する児童は日常的に取り組んでいる歩行を主に取り組み、安定して後ろ向きに歩けるようになったり、教師に支えられて踏み台をゆっくり昇降することができたりと、歩行能力の向上につながった。しかし、音楽が流れている間歩くことが肢体不自由を伴う児童には少し負担になる面があったので、今後は主体的に参加することができるよう、活動や支援を工夫していきたい。

（写真 1）



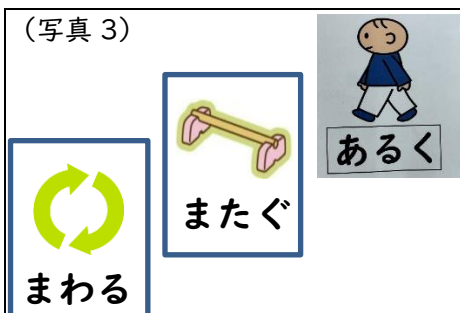
児童になじみの深いシンボルカラーの色をマットに設定した。自分の色が一目で分かるため、どの児童も少ない言葉掛けて参加することができた。大きさも八つ切り画用紙と同じくらいあるため、少し離れた場所からでも見やすく、視力が弱い児童も自分の色のマットを探して自分で移動することができた。

（写真 2）



教師の手本や「前。」という指示だけでなく、イラストと文字と一緒に表示することで視覚的にも分かりやすいように手本動画を作った。児童の実態や運動技能の習熟に合わせて、前後移動に加え、高ばいでの前後移動、片足立ちなど様々な運動を組み合わせて単元を進めたが、初めて取り組む運動でも動画を見ながら同じように動くことができる児童が多かった。

（写真 3）



活動前には本時のポイントとなる動きの手本を見せ、活動中にも意識できるよう絵カードを提示した。活動中も随時「ここ、ポイントだよ。」の言葉掛けを聞くと、意識して足を上げたり、膝をつかないように高ばいをしたりすることができていた。見学の児童に「ポイントが上手にできていた人を探してね。」と言葉を掛けることで、友達の活動を意識して見ることもつながった。

（写真 4）



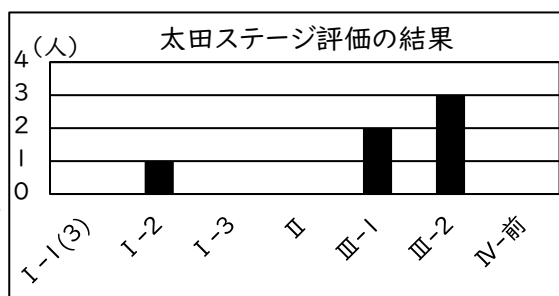
カラーマットダンスで低ハードルを後ろ歩きでまたぎ越している様子である。どの児童も低ハードルに足が当たらないよう気を付けながら進むことができた。隣の友達がハードルをまたぐことができるかを気にしながら歩く児童や、友達と歩く速さを合わせるよう気を付ける児童もあり、協調性を育む機会にもなった。

(5) 小学部第5学年 体育科

① 単元名「サーキット運動」

② 児童の実態

本学年の児童は、簡単な言葉が分かり、日常的な行動であれば指示を聞いて動ける児童が多い。一方で、活動の見通しがもてるような支援や学習課題に意識を向けられるような環境が整っていないと、落ち着いて取り組むことが難しい場面も多い。運動技能に関しては、基礎的な粗大運動や巧緻動作ができる児童から、動きにぎこちなさがある児童、身体的な支援を受けながら用具を使った運動に取り組む児童まで様々である。



③ 単元設定の理由と主なねらい

本学年の体育では、これまで、児童の多様な動きをつくることをねらいに、身近な用具を使った簡単な体づくり運動を単発的に取り上げてきた。本単元では、それらのなかから教室の中でもできるような運動を主に取り上げ、サーキット運動を実施した。繰り返し取り組むことで、運動量を確保できるとともに、用具に応じた体の動かし方が分かり、少ない支援で自信をもって活動できるようになると考えた。活動を通して、基本的な体の動きを身に付けるとともに、前向きに運動に取り組もうとする態度を育てたいと考え、本単元を設定した。

④ 実際の授業の様子

ア「主体的な学び」の場面

落ち着いてサーキット運動の学習ができるように、各運動コーナーの課題は児童が経験したことのある運動から選択した。活動の終わりが分かるように、個別ボードにマグネットで周回数を示し、一周終わるごとに一個ずつ外すようにした。単元のはじめは、周回数だけシールを貼るようにしていたが、たくさん貼りたいという気持ちから1周ごとに1枚貼るという約束を受け入れづらい児童がいた。そこで、マグネットを外していく方法に変えると落ち着いて取り組むことができた。4種類の運動コーナーのうち1種類はタブレット端末を使った課題を設定した。何が出てくるかな、とワクワク感をもって活動に取り組めるように、画面に触ると課題のうち一つが表示されるようにした(写真1)。

イ「対話的な学び」の場面

児童の実態に合わせて、普段あまりしない姿勢を取る、体を支える、力の入れ具合を調節する、バランスを取るなどの観点から運動の選択をした(写真2、3)。繰り返し課題に取り組むことで体の動かし方が分かり、徐々に短い時間で周回できるようになった児童がいた。また、教師の手本を見たり運動のポイントを見聞きたりして、単元の終わりには少ない支援で各課題ができた児童がいた。

ウ「深い学び」の場面

学習を重ねるとサーキット運動のやり方が分かり、一人で次々と取り組んだり、活動用の曲が掛かる間運動をし続けたりすることができる児童が増えた。活動グループの実態に合わせて、タブレット端末に表示される課題の種類や回数を調節し、難しすぎない活動内容になるようにした。体を動かす学習や遊びに積極的ではない児童もいるが、自分のステップに合った課題に取り組み成功体験を重ねることで、苦手だった運動も支援を受け入れてやってみようという気持ちが育ってきた。運動に前向きな児童も、今日はこの課題がしたい、〇回やってみよう、など自分で考えながら活動することがあった。

⑤ まとめ（成果と課題）

単元の終わりには各運動コーナーでの体の動かし方が分かり、一人で、または少ない支援で一連のサーキット運動に取り組める児童が増えた。二つの活動グループに分けて行い、実態によって課題設定を変えたため、児童は新しい運動技能の習得は少なかったが、これまでに学習経験のある運動について、自信をもってやってみようとするようになった。タブレット端末を使って運動をランダムに提示することで、児童によっては期待感をもって取り組むことができ、その他の運動コーナーは固定していたため、安心して運動に取り組めた児童もいたと考える。また、児童が用具や回数などを選択しながら活動する場面を設定することで、前向きに取り組んだり、自分で考えながら活動したりする様子が見られた。今後は、本単元で取り上げた運動に限らず、一人でできるようになった運動について、教師や友達とペアになり相手に合わせて運動調整をする活動を設定し、対話的な学習ができるようにしたい。また、活動前の運動のポイントに合わせて、活動後には取組の様子を視覚的に示し、自分の体の動きに気付けるような場面を増やしていきたい。

（写真1）



タブレット端末に示された複数の「？」マークから一つを選んで触ると、課題が表示されるようにした。する活動が分かるように、絵や写真と短い言葉で示した。不要な操作で画面が変わらないように、あらかじめ制限をかけている。児童によって課題の種類や回数を変え、身体的な支援が必要な運動は外して提示した。繰り返し学習することで、一連のサーキット運動に自分で取り組める児童が増えた。

（写真2）



動きがぎこちない児童、手足の先まで模倣することが苦手な児童がいる。

（運動の一部）机トンネル、荷物運び

机トンネルでは、両手で体を支えたり、背中が机に当たらないように気を付けたりするなど、自分で体勢を考えながら進むことができるようになった。荷物運びでは、ブロックを組み合わせた物を抱えて持ち、腕全体に力を入れた状態を維持できる児童が増えた。

（写真3）



全体的に筋力が弱い児童、体を起こした姿勢が続かない児童、静止したり、ゆっくりと動いたりすることが苦手な児童がいる。

（運動の一部）高ばい、雑巾ウォーク

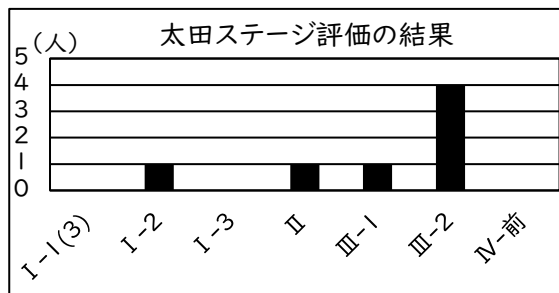
高ばいでは、腕や足に力を入れて短い距離を進むことができるようになった。雑巾ウォークでは、足を踏んばって進んだり、お尻から雑巾が離れないように力の入れ具合を調節したりすることができる児童が増えた。

(6) 小学部第 6 学年 体育科

① 単元名「でんしゃでゴー! (サーキット運動)」

② 児童の実態

本学級の児童は、続けて10分間以上走ることができる児童がいる一方で、体が大きく運動が苦手な児童もいる。また、かがむのが苦手であったり、授業中に座る姿勢が崩れたりするなど基本的な体の使い方に課題のある児童が多い。見通しがもてる活動や、自分が好きなことに関係する活動には、拳手をするなど積極的に参加する姿が見られる。音楽やダンスが好きな児童が多い。



③ 単元設定の理由と主なねらい

本単元のサーキット運動では、指示されたポーズを取って止まる運動をメインとし、かがむ姿勢を促す運動や体のバランスを取る運動などを組み合わせて一つのコースとした。ポーズを取って止まる運動では、腕や足を支持する力を高めることが期待できる。サーキットの中のいろいろな運動を通して、基本的な体の使い方を学習するとともに、二つの運動から一方を選んで取り組んだり、順番を守ったりして指示に従って活動する力を付けられると考え、この単元を設定した。

④ 実際の授業の様子

ア「主体的な学び」の場面

サーキット運動中は曲を流し、曲の終了が運動の終了であることを伝えて取り組んだ。初めは見通しがもてず意欲的ではなかった児童も、学習を重ねると教師の励ましを受けながら最後まで取り組むことができるようになった。サーキットの周回数をマグネットを使って数えていることを理解した児童は、周回数を目標にして、最後まで粘り強く運動できるようになった(写真1)。ポーズを取る場面では、自分の腕や足が今どうなっているのかを確認することができるよう、タブレット端末でテレビ画面にミラーリングしながら撮影し、その場で見えるようにした(写真2)。10秒間ポーズを取ることが分かるように、VOCAに10数える音声を録音して提示した(写真3)。

イ「対話的な学び」の場面

サーキットの各運動に取り組むのに掛かる時間は児童によって異なるため、幾つかの運動で待ち時間が発生する場面があった。フープを置いて並ぶように促し、回数を重ねると手立てがなくても一列に並べるようになった。写真2の待つ場面では、前の友達のポーズがTV画面に映し出されるのに見入る児童もいて、お互いの活動を見合う機会にもなった。また、一人ずつポーズの動画を振り返り、友達同士で評価をし合う時間を設け、友達の体の使い方にも意識を向けるように促した(写真4)。

ウ「深い学び」の場面

ポーズを取る運動を振り返る際には、三つのポイントを伝えてからポーズの動画を見るようにした。ポイントを三つに絞って端的に伝えたり、カードで示したりすることで、どの児童も評価の活動に参加することができた。繰り返し評価をすることで、「手を伸ばす。」というポイントから派生し、見本の通りに手のひらを見せるようにポーズをすると良いと振り返ることができた児童もいた(写真4)。

⑤ まとめ(成果と課題)

体育館を学習の場所にしたことで、二つの運動から一つを選択する場面や大きい器具で体を動かす運動を設定することができた。単元後半には、運動量のさらなる確保を目標にし、各運動間で走るように促したり、コースの途中にろく木の昇降運動とろく木までのダッシュを加えたりした。時には、教師も運動に参加しながら運動量の増加を促すことで、運動後に息を弾ませる児童も多くなった。今後は、児童が体を大きく動かす運動の指導についても考えていきたい。

(写真1)



サーキットの周回数は、一周ごとにマグネットをボードに貼ることで記録した。ボードは全員で共有し、授業の終わりにボードのマグネットを全員で数えるようにした。授業を繰り返すことで、「今日は20周したいよな。」と児童から発言があった。そこで、サーキット運動を始める前に今日の目標周回数を決めたり、周回数を表に記録したりするようにした。「先週より多くなったね。頑張っているね。」「30周を超えるように頑張ろう。もっと走ったら30いけるかな。」など教師の言葉掛けを工夫することで、児童の運動への意欲や運動量の増加を促すきっかけとなった。

(写真2)



その場で自分のポーズを見て修正できるように、タブレット端末で撮影し、児童の姿をTV画面に映した。指示されたポーズを正しく取れるように、画面の横に手本の写真を提示し、手本と自分のポーズを見比べてポーズを正しく修正するように促した。手が伸びていない児童や途中で腕が下がってくる児童には、画面に映る児童のポーズを指さしたり、言葉掛けをしたりして修正を促した。繰り返し取り組むことで、自分で画面に注目し、正しく修正できる児童が増えた。

(写真3)



ポーズの姿勢保持は10秒間を目標とした。時間に見通しがもてるように、10秒間数唱した音声をVOCAに録音し、児童がポーズを取る前に押すように設定した。始まりと終わりが分かるように、数唱の前後には「準備。」「OK。」を加えた。また、複数のポーズの中から一つを選ぶ場所のVOCAには、最後に「くじを戻す。」と録音し、手本カードをかごに戻す指示も加えて、教師の言葉掛けがなくてもカードを戻せるようにした。

(写真4)



授業の終わりに、(写真2)で撮影した動画を振り返った。振り返る際には、ポーズを振り返るための視点をもてるように、「ピタ、とまる。」「てをのばす。」「あしをひらく。」の三つのポイントを提示し、動画を見た後に、特にどのポイントが上手だったかを評価できるようにした。「〇〇さんのポーズはどこが良かったかな。」と尋ねながらカードを提示し、一つを選んで発表するように促した。教師から「〇〇さんが〇〇が良かったと褒めてくれたよ。うれしいね。」と繰り返し、友達からの評価を確実に伝えるようにした。児童は、友達から褒められることで、表情が明るくなったり、友達の話をよく聞いたりする姿が見られた。

4 まとめ

(1) 成果

① 指導計画

単元設定を考えるにあたり、まず確かな実態把握が必要である。児童一人一人の障害の特性を踏まえた運動技能、学級の集団としての学習態勢などを考慮し、1年間を見通した単元計画を立てた。学習指導要領に示されている A から F までの運動領域のうち、各学年での研究授業では次のような内容を取り上げている。

	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	5 年生	6 年生
A 体づくり運動系	○	○	○	○	○	○
B 器械運動系	○	○	○	○	○	○
C 陸上運動系		○	○	○	○	○
D 水泳運動系						
E ボール運動系	○		○			○
F 表現運動系				○		

児童の得意な動き、苦手な動き、身体機能によりできる動きと難しい動きなどを把握し、単元の終わりに目指す姿を構想しながら一人一人の目標を設定するとともに、その目標達成に向けてどのような支援が有効かを模索していった。実態の幅が大きい3年生では、ボール運動を中心としながらも児童によってはボールを使わずに手での倒す活動を取り入れる、各コーナーへの移動の間に基本的な運動ができる用具を設置するなど児童の実態に合わせた目標を達成できるよう工夫がされていた。

② グループ討議を通して

今年度の討議会でも、授業に関連するテーマについて主体的な学びグループ、対話的な学びグループ、深い学びグループに分かれて三つの視点から意見をまとめて発表し合った。テーマの例としては、「振り返りのなかでの効果的な評価（自己評価・相互評価）の工夫」「肢体不自由を併せ有する児童と共に行う体育の指導」などが挙げられる。授業づくりをする過程で迷ったこと、他に考えられる支援の工夫などをテーマにする学年が多く、これまでの取組で効果的だった指導方法や内容、ICT の活用アイデアなどが具体的な意見として出された。学級を客観的に見られる立場の教員から提案されることで、授業者の悩みや葛藤の解決につながるとともに、指導の幅が広がることにもなったと考える。また、テーマに関する文献や資料を全員で読むことで、新しい情報や知識の共有を図った。

③ 学習評価

「知識・技能」では、その場での評価に加え、単元の初期と終わりにどの程度運動技能が身に付いたかの評価を行った。評価の際に効果的だったのはタブレット端末で、動画機能を使って運動の様子を撮影することで、変容を客観的に捉えることができた。「思考・判断・表現」では、児童自身が学習の目標をもって活動することが大切であることを踏まえ、活動前に運動のポイントを児童に分かりやすく伝えるようにした学年が多かった。ポイントに気を付けながら運動しているか、その結果どのような気付きがあったか、またその気付きをどのように発表したかなどを評価できていた。「主体的に学習に取り組む態度」では、目標に対してどのような行動をすれば達成であるかという具体的な評価規準がどの学年でも設定され、適切な評価が行われたと言える。

(2) 今後の課題

今年度の研究では、体育科の授業実践を通し、「主体的な学び」の視点、「対話的な学び」の視点、「深い学び」の視点から授業改善に取り組むことができた。授業内容を見てみると、児童が運動の難易

度を選択できる場面を設定したり、自分で考えて動ける環境や指示の工夫をしたりするなど、前年度と比べて特に「深い学び」の視点で授業を捉えやすくなったように感じた。また、実態の幅広い学級からの児童も主体的に運動できるようにするための活動内容の工夫が提案されると、次に研究授業を行う学年の実態に合わせた形で引き継がれ、事前模擬授業や討議会での意見交換がすぐに授業づくりに生かされていたように思う(資料1)。近年の本校小学部では、児童数の増加、教員数の減少、障害の多様化など環境の変化が著しく、運動量の確保と運動技能の習得を十分に行うために活動内容やチーム・ティーチングの熟考がこれまで以上に求められるようになってきている。しかし、体育科の目標はあくまでも「生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成すること」であり、運動の技能を高めることではないということに留意しなければならない。児童が楽しい、できてうれしいと感じるからこそ技能の習得につながっていくことを忘れず、全ての児童が活躍できる体育の授業づくりに努めていきたい。

(資料1) 討議会での意見より抜粋

【主体的な学び】の視点

- ・難しい課題と簡単な課題を選べるようにすることで、チャレンジしたいという気持ちや安心して取り組みたいという気持ちを引き出せる。
- ・肢体不自由を併せ有する児童だけでなく、認知発達が未熟な児童も主体的に運動に取り組めるようにするために、同じ速さで、同じ課題は難しいので、距離を短くする、その場でできる、座位でできる動きを取り入れる。
- ・運動能力が高い児童には、レベルを上げてもらいながら相談しながら進めるのもよい。ただし、児童によっては友達と違うことをすることに抵抗がある場合もある。友達と同じ活動をしていると感じさせるような工夫が必要。

【対話的な学び】の視点

- ・認知発達の未熟な児童については、人と人だけでなく、教材を介して教師や友達と関わるのが「対話」であると捉える。その児童が興味を示す教材を模索し、教材との対話を積み重ねることで複数の感覚を刺激することが必要。
- ・運動のポイントを視覚的に分かりやすく提示し、そのポイントについて動画やTV画面へのミラーリングなどで客観的に自分や友達を見て評価できるようにするとともに、ボディイメージを高めるための工夫をする。
- ・相手に合わせて自分の力を調整する運動を取り入れる。例えば友達と一緒にボールを運ぶ、手をつないで平均台を渡るなど。

【深い学び】の視点

- ・サーキット運動の良さは、一度うまくいかなくても何度でもチャレンジできること。繰り返すことでコツをつかんで成功し、称賛されることで次の成功につながっていく。
- ・運動のポイント(学習の目標)が提示され、児童が自分で決めたり選択したりすることで、ポイントをクリアするためにどうすればいいのかを自分で考えることが深い学びになる。また、達成感や満足感を得られることで、次への意欲にもつながる。
- ・児童によっては、意図的に難しい運動をサーキット運動の選択種目から外すことも考えられる。教師の援助が多くなることで自分で考えて動く場面が減ってしまうことを防ぐために、難しい運動を過度に頑張らせないというのも支援の一つであると捉える。
- ・肢体不自由を併せ有する児童については、身体的支援で誘導されるばかりにならないように、その児童ができる動きを生かして学習の起点にしたり活躍できる場を設定したりする工夫が必要である。

< 参 考 文 献 >

- 特別支援学校学習指導要領解説 総則等編(幼稚園・小学部・中学部) 文部科学省(2018)
- 特別支援学校学習指導要領解説 各教科編(幼稚園・小学部・中学部) 文部科学省(2018)
- 特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編(幼稚園・小学部・中学部) 文部科学省(2018)
- 太田ステージによる自閉症療育の宝石箱 永井洋子・太田昌考 編 日本文化科学社(2011)
- 発達が気になる子の運動遊び88 松原豊 著 学研教育出版(2014)
- 発達の気になる子の 学校・家庭で楽しくできる感覚統合あそび 川上康則監修 ナツメ社(2015)
- 発達の気になる子の 体の動き しくみとトレーニング 川上康則監修 ナツメ社(2021)
- 視覚シンボルで楽々コミュニケーション 障害者の暮らしに役立つシンボル1000 ドロップレット・プロジェクト編 エンパワメント研究所(2010)
- 視覚シンボルで楽々コミュニケーション2 障害者の暮らしに役立つシンボル1000 ドロップレット・プロジェクト編 エンパワメント研究所(2017)
- 保健体育科における主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくり 福岡県体育研究所(2022)
- <http://www.educ.pref.fukuoka.jp/static/基本研修/義務基本研修/HP>
- 保健体育科における主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくり.pdf 授業
授業改善リーフ 第2集 学びの尺 No.13 埼玉県教育局南部教育事務所(2022)
- <https://www.pref.saitama.lg.jp/g2201/gakkou/manabinor.html>
- 特別支援教育における「児童生徒の一人一人の良い点や可能性の積極的な評価」の在り方に関する一考察
相根良平 京都府総合教育センター(2022)
- http://www.kyoto-be.ne.jp/edcenter/cms_files/kenkyukiyo/3001.pdf
- 「令和の日本型教育」の構築を目指して 文部科学省(2021)
- https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00002.htm

<研究推進者>				
部主事 松本 明美				
尾藤 栄子	佐々木 差余子	三野 邦子	佐藤 志穂	前田 千代
片山 博子	圖子 直美	馬場 三彌子	三好 広恵	青木 弘依
塩月 牧子	丸 早織	山下 里美	多田 美奈	六車 祐太郎
島 育慧	川内 涼太	森 郁水	篠原 徳良	川人 隆芳
川上 千夏	香川 伊紅実			

中 学 部

研究テーマ

年間指導内容についての再検討
～年間指導計画の作成過程改善の試み(2)～



Ⅰ テーマについて

研究テーマ「年間指導計画の再検討～年間指導計画の作成過程改善の試み(2)～」

(1)テーマ設定の背景

同テーマでの校内研究の４年目である。中学部では、過去３年をかけて年間指導計画のあり方や改善について研究を行った。そのなかで、中学部の在籍数や学年の状況の違いの大きさを踏まえると、教科別に３年間のひな型になるような計画案を備える方法ではなく、「これまで何を学び、身に付けてきたか」を把握し、「中学部卒業までに身に付けてほしい学習内容」を見通す改善をすることによって、その間をつなぐ指導計画をより適切なものにしていく方法がより適しているとの方向性を得た。

昨年度は、この方向性に沿って、学習指導要領に示された指導内容の一覧を主なツールとして、年間指導計画の作成過程や必要な資料を備える取組を行った。成果としては、「根拠や手掛かりを踏まえて指導計画や目標を考えることができた」「学習状況の評価や指導の方向性について、複数の教員で検討できた」などの意見が得られた。一方で「学習状況の実態差の大きなグループの指導計画をどう作成すればよいか」「重点的に指導する内容と、幅広い学習内容をどう両立させるか」の難しさは残った。

そこで今年度は、「生徒にとって、これまでの学びとの連続性や学習内容の幅広さ、今と将来の生活のつながりなどを踏まえたより良い学習につながる」「教師にとって、指導内容を選ぶ過程、年間指導計画を立てる過程をより効率化し、業務として連続可能な取組になる」ことを目指して取組の改善と継続可能な形に整える計画とした。

(2)昨年度までの研究の概要

１年目 研究授業を実施した教科でのより適切な年間指導計画の研究

２年目 各教科の年間指導計画作成の観点や改善の方策についての研究

３年目 「中学部卒業までに身に付けてほしい学習内容」等を踏まえた次年度の数学の年間指導計画の作成

２ 研究のねらい

(1)生徒にとって、これまでの学びとの連続性や、学習内容の幅広さ、今と将来の生活へのつながりなどを踏まえたよりよい学習になる。

(2)教師にとって、指導内容を選ぶ過程、年間指導計画を立てる過程をより効率化し、業務として継続可能な取組になる。

3 研究の内容

- (1)この研究で作成した指導計画が、生徒にとって適切なものになっているかどうかを、生徒の変容や指導の手応え等から検討する。
- (2)「学習の実態差(指導目標の違い)の大きな学習グループでの指導計画の立案や指導形態の工夫」「重点的に扱う内容と幅広い学習内容を扱うことのバランスの在り方」について試行、検討し、中学部としてのポイントを整理する。

4 研究の方法

(1)年間指導計画の作成(4、5月)

前年度末に作成した数学の年間指導計画の試案を踏まえた今年度計画の作成にあたっては、「各教科の指導内容一覧表」「年間指導の記録」を参考にし、指導内容やねらいを明確にすることで、今年度の指導方針や方法をグループ、学年、学部で共有することを目指す。

(2)学習内容の習得度の評価と「中学部卒業までに身に付けてほしい内容」の選定(7、8月)

「卒業までに身に付けてほしい指導内容」の検討と選定は、学習指導要領に沿った習得度確認表(資料1 熊本大学附属特別支援学校ホームページより引用)を用いて、国語、数学、生活について実施する。国語と数学については学習グループ、生活は学級の教員で取り組み、客観性を確保するとともに、教員個々の知見や指導経験等を反映できるようにする。学習指導要領に沿った習得度確認表では評価しにくい生徒は「障害の重い子どもの目標設定ガイド(徳永、2014)」を使った評価、目標選定に替える。

一つ一つの項目をチェックすることで実態把握を行い、学年で共有することで2学期以降の指導内容や指導方法の見直しをしたり、目標設定やめあて、手立てなどの見直しと関連付けたりしていき、結果を後半の年間指導計画、指導目標に反映させる。

(3)実際に指導した手応えや生徒の変容をもとに、今年度の年間指導計画が生徒にとって適切なものになったかどうかを振り返る。(9～11月)

研究授業や国語や数学、生活単元学習の指導を通して、今年度の年間指導計画の指導内容やねらいに沿ったものになったかどうかの振り返りを行う。研究授業については、先に挙げた教科以外でもよいこととし各学年で1回ずつ行う。そのうちの1回は全校研究授業、討議会として実施し、香川大学坂井聡教授の指導助言を頂く。学部での討議会を通して教員一人一人から意見を求める。「学習実態差への対応」「学習内容の重点化と幅広い学習内容のバランスのさせ方」について中学部としてのポイントを整理する。

(4)次年度の年間指導計画の作成(12、1月)

年間指導計画の作成において、一連の取組を継続可能なものにするためには、一年間の指導内容や指導方法を踏まえて、次年度の指導内容や指導のねらいを考えておくことで、年度初めの多忙期の負担を軽減し、試案を基に新年度の指導体制での指導内容や方法を考えることができるようにすることが有効である。今年度は、国語、数学、生活単元学習についての年間指導計画の試案を前年度の担当が大まかに作成し、次年度の担当が修正する形を継続可能なものにしていく。

5 授業実践

(1) 中学部第1学年 数学

①単元名「時刻を正しく読もう」

②生徒の実態

繰り返し取り組むことで見通しをもって学習に参加できる。これまでの学習で、具体物の数を2ずつ数えたり、10のまとまりとして数えたりできていて、おおよそ100までの数を数えることができる。時計を読むことに関しては、5分ごとの時刻が読める生徒や長針が文字盤の数字を指している位置で「〇分」かがおおよそ分かっている生徒、短針が次の数字を指しそうなときに「〇時」を読み間違えてしまう生徒等、実態は様々である。

③単元設定の理由と主なねらい

私たちは見通しをもって活動したり、計画を立てたり、他の人と一緒に活動したりする際、時計を見て時刻を確認して行動している。学校生活において、生徒たちは日課表をもとに日々活動しており、授業終了の時刻や時間の感覚が分かれば落ち着いて活動できることにつながると考える。時計を活用し、見通しをもって活動するにはまず、時刻を読む力が必要である。正しい時刻の読み方を理解することは、今後の学校生活や社会生活において、自立して生活や行動をするには必要不可欠な力であると考え、本単元を設定した。

④実際の授業の様子

毎回の授業で5とびの数唱を繰り返し行った。スムーズに読むことができるように、箱の中に5個のりんごが入ったイラストをホワイトボードに貼りながら全員で5、10、15…と60まで数えた後、個別に質問し、数える機会を設けた。繰り返すことで、5とびの数唱のならびを覚えることができた。そして、タブレット端末の時計アプリで長針を動かしながら、5とびの数え方が時刻を読む際にも使えることを意識できるようにした。最初は時刻を読むことができなかった生徒も授業の回数を重ねることで、補助ワークシートを使わなくても、5とびで数えながら5分刻みの時刻を読むことができるようになった。また、学校での生活場面と関連付けられるよう、日課表を作成する活動を取り入れた。その日の授業や給食の写真、またはイラストで何時間目の授業か確認し、テレビ画面に映した時計の画像と同じ時刻カードを探し、日課表に貼って完成させた。

⑤まとめ（成果と課題）

5分刻みの時刻の読み方を繰り返し学習することで定着し、5分刻みで時刻を読むことができるようになった。時刻の読み方は理解できたものの、実際の生活に生かせるようになるには授業だけでは不十分である。日頃から時刻を読む機会を意図的に設けたり、より生活に生かすために、〇時まであと〇分といった時間の幅を学習したりしていく必要があると感じた。

(2) 中学部第2学年 理科

①単元名「空気についてしらべよう」

②生徒の実態

本学年は中学部2年生11名の生徒で構成されている。個々の実態の差は非常に大きく、簡単な内容であれば全体への指示で理解できる生徒もいるが、言葉での指示理解が難しい生徒もいる。物の操作に関しては、工作や折り紙が好きで細かい物も器用に扱うことができる生徒や力加減をするのが難しい生徒、教師と一緒にいろいろな物を触ったり持ったりすること、教師の指示したところへ物を置くことを目標として取り組んでいる生徒と実態は多様である。入学後これまでに理科の物質・エネルギー分野では、音やゴム、水について、物作りや実験を通して学習してきた。実験に対しては興味をもって臨み、積極的に参加できるようになってきた。予想に関しても、正しく予想したり予想が間違っていたことを実験結果から自分で気付いたりする生徒が出てきた。

③単元設定の理由と主なねらい

空気は温度変化によって体積が変化するという性質がある。空気は、私たちにとって身近であり必要不可欠な物質で、空気がなければ呼吸できず生きていくことができない。しかし、身近すぎて触れていることになかなか気付かないし、目に見えないのでその存在を意識せずに生活していることが多い。本単元では、空気を使った実験を中心に学習を展開した。身近な物質を使って実験し、起こる現象を予想し、自分の目で確かめるということは、観察、実験などに関する初歩的な技能を身に付けることや疑問をもつ力と仮説を立てる力を養うことにつながる。変化を予想したり空気の性質を理解したりすることが難しい生徒にとっても、変化に気付いたり注目したり少し先のことを予測したりする経験をするのに適していると考えた。空気の性質について知ることは、冬に暖房をつけたとき、下の方が温まりにくいのでサーキュレーターで空気を循環させたり、暑い日に締め切った家は1階より2階の気温が高いので2階の窓を開けて換気したりという工夫につながる。また、地球環境問題である地球温暖化や大気汚染について知り、自分たちの生活を振り返るための基礎として大切であると考え、本単元を設定した。

④実際の授業の様子

空気砲で的を倒す実験では、回数を重ねることで空気という言葉やその存在について理解を深めるとともに、一人一人が自信をもって楽しみに活動に取り組むことができるようになっていった。また、触ったり目の前で見たといった体験的な学習を多く取り入れることで少しずつ空気の存在を意識でき、「空気」という言葉も徐々に定着してきた。空気の体積変化の実験では、座席をUの字にして中央に実験用の机を配置し、間近で実験することで、注目することが難しい生徒も注目したり、音を聞いて声を出す等の反応をしたりすることができた。順序だてて予想することはなかなか難しかったが、自分なりに考えて予想を発表することができる生徒もいた。

⑤まとめ（成果と課題）

空気の熱膨張という、目に見えない理解が難しい内容であるが、容器の変化に置き換えることで、視覚的、聴覚的に捉えやすく、実験結果を生徒にとって分かりやすくすることができた。危険な実験のため教師が提示する実験と、生徒自身がができる実験を両方行ったが、後者のときは生徒が非常に積極的に動いていた。五感を使うという意味でも、できるだけ生徒自身ができる活動を多く取り入れていきたい。

実態差が大きい集団で実験を行うときには、五感を使う体験的な活動と、実験の予想をしたり結果をまとめたりする活動のバランスをとって授業を組み立てる必要がある。1時間中ずっと一人一人、全員に焦点を合わせ続けるのは難しい。例えば、一緒に学習しているが、この質問をするのはこの生徒だけというように、焦点を合わせるところを限定することが大切である。両方の活動を大切にしながら、単元の中でその活動はどちらに重きを置くか教師がしっかり意識して授業作りをするようにしていきたい。

(3) 中学部第3学年 生活単元学習

①単元名「みんなで行こう！修学旅行 Part 2」

②生徒の実態

本学年は、1組5名、2組4名の計9名で構成されている。どの生徒も授業でタブレット端末を使う機会が多く、活用の仕方に慣れてきている。自分で考えて行動することができる生徒から、教師の言葉掛けが必要な生徒まで、実態に幅がある。身だしなみやマナーについては、不十分な生徒が多く、昨年度から学習を続けている。

③単元設定の理由と主なねらい

修学旅行は、今まで学習してきたことを発揮する場である。本単元では、社会につながる自立的な力を育てることができるよう、行き先の調べ学習に加え、集団行動や身だしなみ、マナーについての学習も取り入れた。また、生活単元学習は教科等を合わせた指導であるため、国語科や社会科、道徳科等様々な教科の内容を取り入れ、目標や学習内容を構成している。

④実際の授業の様子

・行程を復習する。

知的障害などがある人に向けた行動支援用アプリケーション「アシストガイド（ソフトバンク社製）」を使い、修学旅行の行き先の順番を写真付きで確認した。口頭で答える生徒、名称カードを見て正しい方を選ぶ生徒、いずれも繰り返し学習することで、順番を覚えることができた。

・修学旅行の行き先について調べたことを発表する。

前時で調べた各場所の見所をグループ同士で共有した。役割分担して発表することで、グループ内で協力することができていた。他のグループは、good と書いているうちわを見せることで発表グループに良かったところを伝えた。三つの項目（声の大きさ、提示の仕方、協力）のイラストカードを手掛かりに、どこが良かったかを生徒同士で話し合っていて決めることができていた。

・集団行動の練習をする。

修学旅行当日を想定し、教師の指示に従って1列、2列に並んで集合する練習を行った。教師の言葉掛けをできるだけ少なくすることで、生徒同士が協力して並ぶことができるようになった。また、集合写真を撮る練習では、教師に代わって写真を撮りたいと希望する生徒もあり、積極的に活動することができていた。

・「すてきな中学生ノート」で身だしなみやマナーを振り返る。

「時間を守る」や「ろうかは歩く」、「服装を整える」等自分の身だしなみやマナーについて、テレビ画面または手元のイラストを手掛かりに、○×を付けて振り返った。「すてきな中学生ノート」は昨年度から使っており、中学生としてのマナーが身に付きつつある。

⑤まとめ（成果と課題）

生徒の集中が途切れないよう一つの活動時間を短くすることで、数多くの学習活動にも意欲的に取り組むことができ、繰り返し学習することで生徒たちは目標以上のことができるようになった。修学旅行当日も、ほとんどの生徒が教師の指示を聞いて素早く列に並んだり、公共の場でマナーを守ったりすることができており、学習してきた成果を発揮することができていた。今後は教師の言葉掛けを端的にしたり、失敗してもいいという環境、雰囲気をつくったりと、生徒がより一層自分で考えて活動できるようにしていきたい。

生活単元学習指導案

指導者:T1 大山衣美 T2 高木美智代
T3 山本健二 T4 安藤はるな

1 日時 令和4年10月5日(水) 10:35~11:20

2 対象 中学部3年 生徒9名

3 場所 中学部 3年1、2組教室

4 単元名(題材名)

「みんなで行こう!修学旅行 Part2」

5 単元(題材)について

(1) 単元(題材)について

修学旅行は、中学部のなかで生徒たちが楽しみにしている行事の一つである。本単元は、修学旅行の目的や意義を知り、旅行の手順や準備、心構えなどを学ぶことを通して社会につながり、自立的な生活に結び付く力を実践的に育む学習である。また、これまで教科等の学習で身に付けた力を十分発揮できる機会として考え、学習活動では主に、自分が調べたことを相手に伝える、集団として行動する、中学生としてのマナーを習得するなどの内容を取り扱う。例えば、タブレット端末を使って調べることは、生徒にとって新しい発見や、これまでになかった興味を広げることができる。旅行先の場所や見所を調べ、実際に訪れる経験を積むことは、卒業後も自分で行きたい所を調べたり実際に旅行したりするなど、より豊かな生活につながると考える。さらに、金銭の支払い、宿泊施設での食事や入浴、公共施設の利用の仕方など社会人としてのマナーの向上もねらえる。そして、修学旅行を通して、互いの存在を意識し合い、共感的な人間関係を育成できると考え、本単元を設定した。

なお、本単元は「国語科」の平仮名を使って読むことや相手に分かりやすく伝えること、「社会科」の身近な県の地理的環境、「特別の教科 道徳」の広い視野に立って道徳的判断で行動するなどの内容を中心として、学習内容や目標などを構成する。

(2) 生徒について

本学年は、1組5名、2組4名の計9名で構成されている。これまでに生徒は、本単元に向けてタブレット端末を活用し、社会科では四国各県の位置や特産品、理科では生き物の生態などについて調べてきた。しかし、個々で調べることが多く、相手の話を聞いたり、自分の意見を伝えたりすることができる生徒は少ない。また、自分で考えて行動することができる生徒から、言葉掛けが必要な生徒まで実態に違いがある。衛生管理や身だしなみについては、意識して改善しようとする生徒や、教師の介助が必要な生徒など習得の状況に幅がある。昨年度から実践してきた「みんなで行こう!修学旅行」の学習を通して、規則やマナーなど個人に関することは意識できつつあるが、集団行動への対応や他者との良好な関り方の育成は、まだ十分とは言えない。

(3) 指導について

指導に当たっては、学習内容をより明確にし、視覚的に捉えることができるよう、アニメーション付きのスライドをテレビ画面に表示したり、個々に作成したワークシートを活用したりする。調べ学習では、班別活動を設定することで、相手の話を聞いたり自分の意見を伝えたりするなど、コミュニケーションスキルを高めることもねらいたい。また、生徒同士が話し合って調べたことを発表する場を設け、発表後は外国語で学習した英単語を使って称賛し合い、協力して作り上げることの達成感も味わわせたい。集団行動については、修学旅行での動きをイメージすることができるよう、T1が添乗員に扮して登場したり、T3を中心に整列したり集

合写真を撮ったりする活動を取り入れる。その際、全員が素早く行動するためには、互いのことや集団のことを考え協力し合うことが大切であると伝え、協調性を高めたい。身だしなみやマナーについての学習では、昨年度から使用している「すてきな中学生ノート」を活用し、自己を評価することで日常生活を振り返り改善する意識を高めたい。さらに、修学旅行当日は、添乗員に生徒一人ひとりのマナーや身だしなみについて評価をしてもらう機会を設けることで、今後の社会人としての実践力の習得に役立てたい。

6 単元の目標

知識・技能	・修学旅行の日程が分かる。
思考力・判断力・表現力等	・指示を聞き行動したり、友達と話し合って意見をまとめたりする。
学びに向かう力・人間性等	・「すてきな中学生ノート」を使って、自らの身だしなみやマナー、生活態度を振り返り、目標を達成するよう努力する。

7 指導計画(13時間 本時13/16)

学 習 活 動	授 業 時 数 (時)															
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
修学旅行の行き先や交通手段を知る。																
香川県や愛媛県の場所を知る。																
香川県のテーマパークを調べる。																
愛媛県の美術館、博物館、動物園を調べる。(グループごと)																
調べたことを発表する。																
集団行動の練習をする。																
身だしなみやマナーを振り返る。																
修学旅行の振り返りをする。																

8 本時の活動

(1) 目標

知識・技能	・行き先の名称を言ったり、カードを選んだりする。 ・二日間の行程が分かる。
思考力・判断力・表現力等	・教師の指示を聞いたり、友達の動きを見たりして行動する。 ・友達の感想を聞き、グループの意見をまとめる。
学びに向かう力・人間性等	・イラストや教師の言葉掛けを手掛かりに、「すてきな中学生ノート」に評価しようとする。 ・生活態度や身だしなみを評価し、改善点を考えようとする。

(2) 実態と個別目標及び評価

A	実態	・地理に興味があり、四国の県名や知っている施設名も複数ある。 ・指示をよく聞くことができるが、自分本位に行動することがある。 ・入浴や歯磨き、爪切りなど清潔面に課題があるが、意識できるようになってきた。	
	目標	・二日間の行程が分かる。…(知) ・友達の感想を聞き、グループの意見をまとめる。…(思) ・生活態度や身だしなみを評価し、改善点を考えようとする。…(学)	評価 規 準 ・行程について正しく伝えることができたか。…(知) ・友達の考えを参考に、意見を一つにまとめることができたか。…(思) ・改善点を見付け、日常生活を省みようとしたか。…(学)
B	実態	・四国の位置や県名などが分かるが、話すことが苦手なため声が小さくなることがある。 ・指示をよく聞き、周りを見て行動することができる。 ・服装が時々乱れることはあるが、おおむね身だしなみやマナーについて理解している。	
	目標	・「アシストガイド」を手掛かりに、二日間の行程が分かる。…(知) ・友達の感想を聞き、教師と一緒にグループの意見をまとめる。…(思) ・生活態度や身だしなみを評価し、改善点を考えようとする。…(学)	評価 規 準 ・行程について正しく伝えることができたか。…(知) ・自分の考えを伝え、友達の意見を聞くことができたか。…(思) ・改善点を見付け、日常生活を省みようとしたか。…(学)
C	実態	・四国の位置や県名などが分かる。施設の名称については、繰り返し学習する必要がある。 ・クラスのリーダー的存在であり、教師の指示を聞いて行動することができる。 ・身だしなみやマナーについて理解し、自分で服装を正したりルールを守ったりすることができる。	
	目標	・「アシストガイド」を手掛かりに、二日間の行程が分かる。…(知) ・友達の感想を聞き、教師と一緒にグループの意見をまとめる。…(思) ・生活態度や身だしなみを評価し、改善点を考えようとする。…(学)	評価 規 準 ・行程について正しく伝えることができたか。…(知) ・自分の考えを伝え、友達の意見を聞くことができたか。…(思) ・改善点を見付け、日常生活を省みようとしたか。…(学)

D	実態	・平仮名の読み書きが不十分であるが、県の位置や施設名について関心がある。 ・教師の指示を聞いたり友達の動きを見たりして行動することができるが、納得のいかないことに対して気持ちが不安定になることがある。 ・自分で身だしなみを整えたり、マナーを守ったりすることが増えた。	
	目標	・語頭音を聞いて、行き先の名称を言う。…(知) ・指示を聞き、周囲を見て考え行動する。…(思) ・生活態度や身だしなみを評価し、改善点を考えようとする。…(学)	評価基準 ・語頭音を聞いて、名称を正しく答えることができたか。…(知) ・指示を聞いて考え、正しく並ぶことができたか。…(思) ・改善点を見付け、日常生活を省みようとしたか。…(学)
E	実態	・県名や位置について、教師と一緒に確認する必要がある。 ・一斉指導が理解できないことがあるため、個別に言葉掛けが必要である。 ・ズボンからシャツが出たり、ボタンを留め忘れたり、服装の乱れが多い。	
	目標	・文字カードの行き先を選ぶ。…(知) ・教師の指示を聞いたり、友達の動きを見たりして行動する。…(思) ・教師の助言を聞いて内容が分かり、評価欄に印を付けようとする。…(学)	評価基準 ・二枚のカードから正しい名称を選ぶことができたか。…(知) ・教師や友達の指示を聞いて行動することができたか。…(思) ・助言を手掛かりに、日常生活を評価しようとしたか。…(学)
F	実態	・香川県の位置はおおむね覚えており、修学旅行の行き先に興味がある。 ・全体への指示を聞いて行動することができるようになってきた。 ・身だしなみが不十分なときがあるが、教師の指示で直すことができる。	
	目標	・文字カードの行き先を選ぶ。…(知) ・教師の指示を聞いたり、友達の動きを見たりして行動する。…(思) ・教師の助言を聞いて内容が分かり、評価欄に印を付けようとする。…(学)	評価基準 ・二枚のカードから正しい名称を選ぶことができたか。…(知) ・指示を聞いて、友達と一緒に行動することができたか。…(思) ・助言を手掛かりに、日常生活を評価しようとしたか。…(学)
G	実態	・香川県の位置はおおむね覚えているが、施設名は不十分である。 ・教師の指示を聞いて行動することができるが、周りを見て動くことは不十分である。 ・身だしなみは不十分なところがあるが、教師の指示を聞いて直すことができる。	
	目標	・文字カードの行き先を選ぶ。…(知) ・教師の指示を聞いたり、友達の動きを見たりして行動する。…(思) ・教師の助言を聞いて内容が分かり、評価欄に印を付けようとする。…(学)	評価基準 ・二枚のカードから正しい名称を選ぶことができたか。…(知) ・指示を聞いて、友達と一緒に行動することができたか。…(思) ・助言を手掛かりに、日常生活を評価しようとしたか。…(学)
H	実態	・県名や位置は不十分なところがある。 ・教師の指示を聞いて行動することができるが、納得のいかないことに対して気持ちが不安定になることがある。 ・マスクの着用や服装など、不十分なところが多い。	

	目標	・文字カードの行き先を選ぶ。…(知) ・教師の指示を聞いたり、友達の動きを見たりして行動する。…(思) ・教師の助言を聞いて内容が分かり、評価欄に印を付けようとする。…(学)	評価標準	・二枚のカードから正しい名称を選ぶことができたか。…(知) ・指示を聞いて、友達と一緒に行動することができたか。…(思) ・助言を手掛かりに、日常生活を評価しようとしたか。…(学)
	実態	・平仮名読み書きが不十分であり、県名や施設名等を教師と一緒に確認する必要がある。 ・毎日の決まった日課であれば、教師の指示を聞いておおむね行動することができる。 ・身辺処理全般に教師の言葉掛けや少しの援助が必要である。		
I	目標	・写真カードの行き先を選ぶ。…(知) ・教師の指示を聞いたり、友達の動きを見たりして行動する。…(思) ・イラストを手掛かりに、教師と一緒に評価欄に印を付けようとする。…(学)	評価標準	・二枚の写真カードから正しい行き先を選ぶことができたか。…(知) ・教師や友達の指示を聞いて行動することができたか。…(思) ・イラストを見て、教師と一緒に日常生活を評価しようとしたか。…(学)

(3) 準備物

テレビ、タブレット端末10台、ワークシート、行き先写真カード、行き先文字カード、goodうちわ、発表評価カード、添乗員グッズ、拡大写真、すてきな中学生ノート9冊

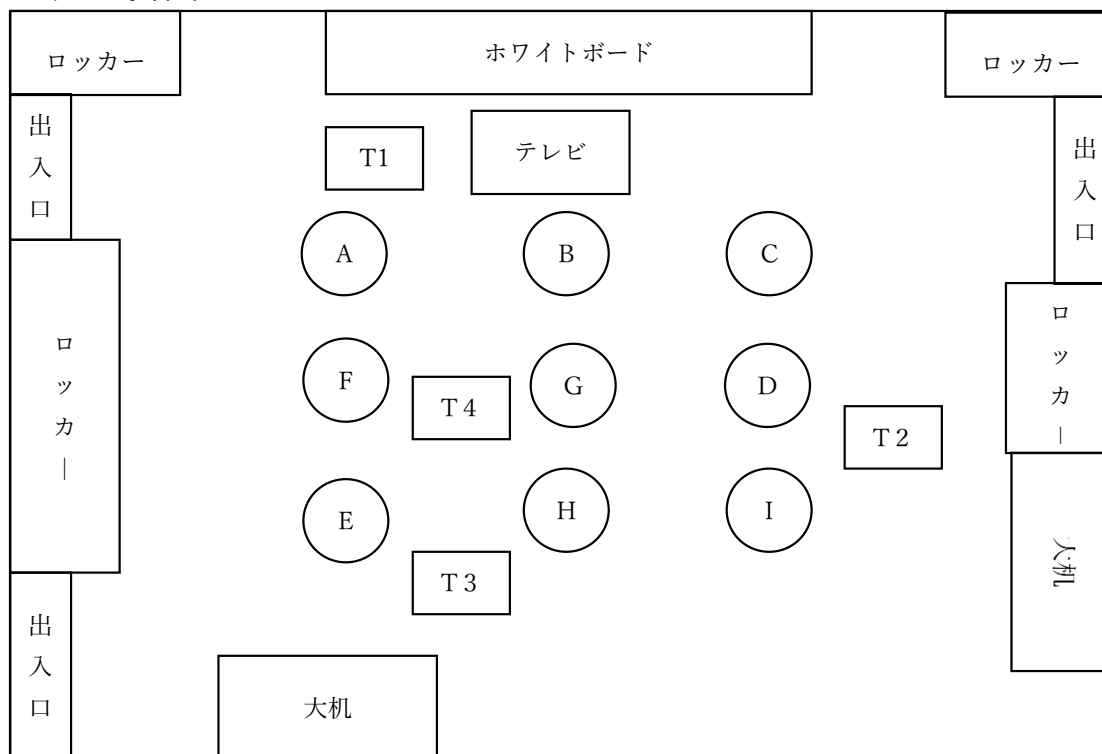
(4) 学習指導過程

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1 始まりの挨拶をする。	・授業の始まりを意識することができるよう、日直に号令を掛ける合図を出す。
2 行程を復習する。	・修学旅行で訪れる県が分かるよう、四国の地図をテレビに表示したり、手元のワークシートを使って確認するよう促したりする。 ・各自で行程を確認することができるよう、タブレット端末のアプリケーション「アシストガイド」を使う。 ・行程通りに行き先の名称を答えることができるよう、T3、T4はE、F、G、Hに2枚の文字カードを、T2はIに写真カードを提示し、正しい名称を選ぶよう促す。
3 愛媛県内の行き先について調べたことを発表する。 (1) 三つのグループに分かれる。 { グループ1：C、D、I (T2) 博物館 グループ2：B、E、H (T3) 動物園 グループ3：A、F、G (T4) 美術館	・グループ別発表に向けて、役割分担や発表内容を互いに確認する時間を設ける。 ・生徒同士が活発にコミュニケーションを図ることができるよう、イラスト付き役割分担表や発表台本を書いたワークシートを利用する。 ・前時までに調べた内容を振り返ることができるよう、タブレット端末の使い方をテレビ画面に表示したり、スクリーンショットを見返すよう促したりする。

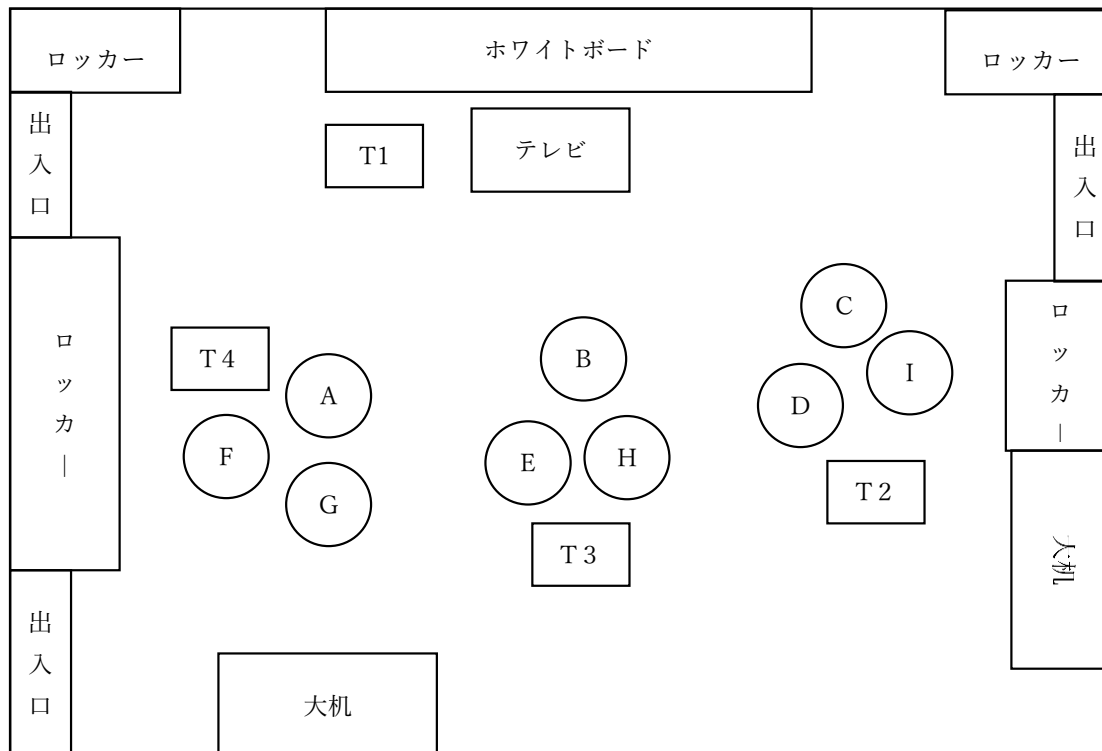
(2) 各行き先の見所を発表する。 ①グループ2…発表 (グループ1、3…評価) ②グループ3…発表 (グループ1、2…評価) ③グループ1…発表 (グループ2、3…評価)	・各場所の見所をグループ同士で共有することができるよう、前時で調べた各グループのワークシートを人数分用意しておく。 ・他のグループの発表について、グループ内で話し合う手掛けとして、声の大きさ、提示の仕方、協力しているかなどのイラストを準備する。 ・goodうちの使い方を説明し、グループの発表で一番良かったところを聞く。
4 集団行動の練習をする。 (1) 1列に並ぶ (2) 2列に並ぶ (3) 集合写真の隊形に並ぶ	・どこに並べばいいか迷っている生徒がいるときは、友達同士で声を掛け合って協力するよう伝える。 ・並び方が分かるよう、最初はテレビに顔写真を提示しながら端的に指示を出す。 ・指示を統一するために、T4だけが指示を出すようにする。 ・修学旅行で集合写真を撮る雰囲気を作り出すために、テーマパークのキャラクターの拡大写真をホワイトボードに提示する。 ・写真を撮るときは静かにマスクの着脱をするよう促す。 ・T4は、写真を撮ることへの興味を引き出すために、生徒にカメラ系の交代を依頼する。 ・表情や目線などを確認できるよう、撮った写真をテレビに映して振り返る。
5 「すてきな中学生ノート」で身だしなみやマナーについて振り返る。	・「すてきな中学生ノート」の清潔、身だしなみ、マナー、態度についてイメージをもつことができるよう、各項目の具体例をイラストでテレビ画面に表示する。 ・日常生活での身だしなみをより身近に意識することができるよう、自らの一週間を振り返り、各項目について○×で記入するよう促す。 ・E、F、H が評価する内容が分かるようにT3、T4はイラストを示したり具体的に説明したりする。 ・I にはT2が2枚のイラストを提示し、自己評価を選択するよう言葉掛けをする。 ・各自が改善する点を見付けられるよう、それぞれの自己評価を聞き、修学旅行に向け日常生活で実践するよう伝える。
6 終わりの挨拶をする。	・授業の終わりを意識することができるように、日直に号令を掛ける合図を出す。

(5) 教室配置図

・全体での学習時

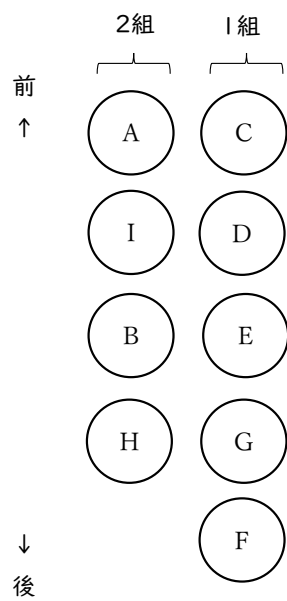


・グループでの学習時

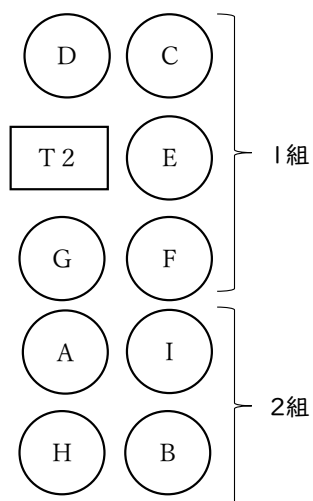


・集団行動

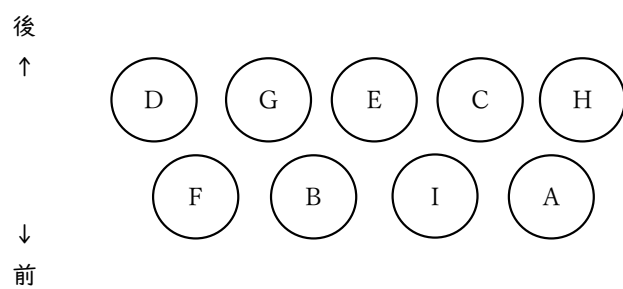
○1列



○2列



○写真撮影



(4) 授業実践のまとめ

研究授業後の中学部での討議会において、各教科領域の授業内容に加え、学部全体の学習形態の見直しや今後の方向性を考える観点で四つのテーマについて話し合いを行った。

テーマ①

「授業で取り組むだけではなく、生活の中で使える力にするために工夫している点について」

数学の授業で行った時計の学習が生活と結び付くよう、始業時間や終業時刻、活動の始まりや終わりの時間の確認、時計表示と言葉の一致を目指した言葉掛けをしたり時計を意識的に見るような促しをしたりするなどして、生活の中で時間や時計を意識しやすくする関わりを行う、また、じゃんけんやしりとり、帰りの会での出来事発表、日記等、生活の中で国語の基礎的な力を伸ばすことを目指した関わりを行うなどの意見が出た。

テーマ②

「ICT 機器とアナログ教材の融合と、その使い分けの仕方について」

ICT 機器とアナログ教材の利点と問題点に触れながら話を進めた。

ICT 機器の活用は、身近にないものに触れる機会を増やすことができ、学校では体験できないことを疑似体験でき、視聴覚から得られる刺激でより興味関心を引くことが可能となる。肢体不自由があり、活動が制限される生徒にも操作が簡単で扱いやすいものを提示することができたり、自主学習の場面では、一人での取組が可能になったりする。学習グループで情報を共有する、注目してほしい部分を強調する、全体への提示教材の作成を簡略化するなど、アプリケーションの種類や活用方法についても情報交換を行うことができた。

アナログ教材の活用は、具体物を操作することで手指の巧緻性や意識を高め、実際に触れたり動かしたりすることで記憶や理解を深めることが可能になる。また、プリント教材への取組は、積み重ねた学習の成果を残すことができるため保護者との情報共有にも役に立つ。

どちらの教材を使用するかは、生徒の実態や身に付けさせたい力、学習内容によって異なるため、学習グループでの教材研究を行い取り入れることを続けていく。

テーマ③

「生徒の実態差が大きな学習グループでの取組の中で、一人一人に焦点を合わせた指導の工夫や、反応を引き出すために工夫している点について」

生徒の実態に合わせて実験や体験的活動を取り入れていくことで、焦点を合わせた指導が可能になる。実態に合わせるためには、アセスメントによる実態把握を行ったうえで、できること、できないことを見極め、生徒に合わせて難易度を変えて教材の提示や質問の仕方を工夫し、授業の中で生徒に合わせて一人一人が活躍できる場面を設けていく。障害の重い生徒には、味覚や触覚などの五感に訴える体験型の教材を提示するとともに、単元やその日の授業の目標も教科の枠を超えた感覚や操作性の内容に重点を置くことで、生徒の反応をより多く引き出すことができると考えられる。

テーマ④

「教科の指導を通して、実態に応じて繰り返しの学習の中で定着を図ることも多くあるが、このように重点をあてて時間をかけて指導することと、幅広い内容を取り扱うことのバランスをどのようにとるかについて」

学年全体やグループ学習での取組について話し合った。

国語と数学については習熟度別グループに分かれており、少しずつレベルアップしていくグループと、定着を図るために生徒に合わせた内容で繰り返し学習に取り組むグループに分かれた指導が行われているが学年が多い。社会科、外国語では、3年間でまんべんなく幅広く学習するために、3学年で学ぶ分野や内容を系統的に学習できるように、中学部ではある程度の共通理解がある。理科については系統性をもたせたものはないものの、前年度までの年間指導計画を参考に学習集団に合わせ、学年ごとに実施する内容のバランスを考えて計画されている。理科、社会科、外国語については、学年全体での学習が行われており、全体学習の中で理解を深めたり学習の幅を広げたりできるよう、単元設定や提示教材の工夫を行っており、指導方法についても検討が重ねられている。

【全校研究授業討議会からの考察】

坂井聡先生より

「共感的に感じ、肯定的に返し、ちょっと寛容に。」

「分かるように伝えること、分かるように伝えてもらうこと。」

「選ばれる学校、個別に必要と思われる学校に」

生活単元学習は、学活での話し合い、数学での小遣い、社会科での地理など、教科指導だけで難しい内容を統合して指導できるが、教科の内容を丁寧に押さえた指導計画や、幅広い実態の生徒に応じた内容や目標に、臨機応変に変更して指導する必要がある。

「特別な状況において、個別に必要とされる配慮」である合理的配慮は必要不可欠であり、合理的配慮の否定は差別になる。インクルーシブ教育が求められる現在、特別支援学校の存在意義が問われることも増えた。地域に「選ばれる学校」になるために、本校が目指すところを「売り」として外部に発信できるようにしていくことが必要になった。

そこでポイントとなるのが構造化である。生徒に対して教師が出すプロンプトは、果たして生徒に有効なのか。手掛かりを与えようとするときに「分かるように伝えている」だろうか。生徒は、うまく「分かってもらえるように伝える」力を身に付けることができるようになっていだろうか。コミュニケーションは、個に合わせたものに設定すべきであり、その方法や手段は合理的配慮に基づいたものでなければならない。思考を促したり、失敗を経験とした成長へと結び付けたりすることができるように、成長に合わせてプロンプトの見直しや改善を続けていく必要がある。

社会が子供に合わせる時代である。子供の側に立つためには、今一度生徒に何が必要であるかを立ち止まって考えることが大切で、日々の授業の中で考えながら指導方法や方針を考えていく必要がある。これは、研究授業を通しての課題分析や中学部の年間指導計画の作成の取組につながる。改めて、実態を正確に把握し、その指導を実践するために改めて指導計画の見直しを図る PDAC サイクルと指導者の情報共有の重要性を感じることができた。

6 まとめ

中学部での取組をもとに、今年度の研究の内容や研究のねらいに照らして成果と課題をまとめる。

研究の内容①

この研究で作成した指導計画が、生徒にとって適切なものになっているかどうかを、生徒の変容や指導の手応え等から検討する。

従来から年間指導計画の内容は、学期末に指導内容やねらい(目標)など、実施した授業を振り返り活動内容や指導内容、指導方法の変更や改善点を記録している。この取組をもとに、次の学期の指導内容を確認するとともに、実態に合わせて教材教具や指導方法の見直しを加えるようにしている。

それに加え、夏季休業中に学習習得度確認表のチェックや「障害の重い子供の目標設定ガイド(徳永、2014)をもとに教科目標を設定する検討(資料3)を行い、教科ごとの目標の一覧をもとに学年団で共通理解を図ることで、次の学期以降の指導に反映させていくことができるようになった。

この研究より、この教科目標の設定や検討が指導や目標設定に役立っており、作成された国語や数学の指導計画が日常生活の指導や生活単元学習、作業学習、理科、社会などの教科等の指導に反映されるとともに、生徒の段階的指導に生かされているとの意見が多く見られた。

研究の内容②

「学習の実態差(指導目標の違い)の大きな学習グループでの指導計画の立案や指導形態の工夫」「重点的に扱う内容と幅広い学習内容を扱うことのバランスの在り方」について試行、検討し、中学部としてのポイントを整理する。

生徒の実態差が大きい学習グループでは、一人一人の実態に合わせた内容を授業に盛り込む必要がある。少人数で構成される習熟度別グループの取組であれば目指す目標はある程度共通のものとして絞りやすいが、集団が大きくなるとその実態差に合わせた目標設定の難しさは大きくなる。そこで、実態差の大きい中学部2年の研究授業(P.30)において、障害の重い生徒の目標の一つを、五感に訴え、感じたことを表出する項目に設定し、授業を実施した。授業後の討議会で討議した結果、学年内で指導グループを分けることなく授業を行う場合には、実態に合わせた目標を設定するために授業内容を柔軟に考えて設定し、生徒の目標に幅を持たせた授業を構成するという方向性を得た。

例えば授業内で生徒を二つのグループに分けて考えてみる。比較的習得度が高いグループの指導は、思考力や判断力を養うべく、できるだけ幅広い学習内容を押さえつつ卒業までに身に付けさせたい内容の定着を図っていく。一方、障害の重い生徒の属するグループでは、五感に働き掛け、気付きや注目、関心、期待を引き出すような内容を盛り込み、活動性を高めるために繰り返し取り組んだり、経験したことに対して自分なりの表出方法で相手に伝えたりすることを目指していく。生徒が表現していることを教師が受け止めたり認めたりすることで、コミュニケーション能力や表出する力を更に伸ばしていくことができるため、教師側の「見る力」「受け止める力」を高める努力を続けることが求められる。

教科の指導では、小学部の段階の内容や、認知発達を促すための内容も取り入れ、柔軟に目標を設定することで、指導内容に幅をもたせる。指導計画は、実態に合わせて幅をもたせた複数の学習内容やねらいを立て、授業においては一人一人にその時間のどこかで活躍できる場面を設定することで、実態差の大きな学習グループの授業が実施可能ではないかとの考えに至った。

研究のねらい①

生徒にとって、これまでの学びの連続性や、学習内容の幅広さ、今と将来の生活へのつながりなどを踏まえたより良い学習につながる。

昨年度までの取組に続き、既習の内容を丁寧に見ていくことで、生徒一人一人の実態が把握でき、学年や学級、グループでの共通理解を図るツールとして定着してきている。複数の目で確認する作業は時間がかかるが、共通理解が得られるとともに新たな気づきがあり、時間に見合った価値があるとの前向きな意見も多く見られた。課題としては、項目にやや抽象的な表現での記述が含まれていたり、誰もが分かりやすい表記ではない内容もあったりしたが、学習指導要領の解説と照らし合わせて判断していくことで内容の理解ができる。改めて入学前の個々の既習の内容やこれまでの学びの定着段階が把握できるため、それに積み上げる学習内容の設定が可能になると考えられる。

研究のねらい②

教師にとって、指導内容を選ぶ過程、年間指導計画を立てる過程をより効率化し、業務として持続可能な取組になる。

指導内容を選ぶ過程では、特に初年度に時間を要する傾向が強いが、担当教科を分担し、個々にあらかじめ目を通しておき学年の議題に挙げる等の取組の手順で、時短が可能になり業務として持続可能な取組になるものと考えられる。また、指導内容を学年一覧（資料2）にまとめる取組を加えることで、共通理解を図りやすくなる。年度末には、年間指導計画の試案を作成することで、次年度の取組と方向性の大枠を前年度中に計画することができる。今年度の指導内容や方針を見直し、生徒一人一人に必要な身に付けさせたい内容を盛り込んだ指導計画を学年団やグループで検討し引き継ぐことが可能である。また、来年度の取組に、大まかな見通しをもち共通理解ができるようになるとともに多忙感のある年度当初の業務内容の軽減にもつながる。

今年度は、昨年度末に作成をしていた数学の年間指導計画の試案を引き継いで作成した。前年度末に試案を作成することで、数学の教科担当者より「素地があることで作成が取り組みやすく時短になった。」との意見が多く聞かれた。その感想や評価を受け、前年度の教科担当者が次年度の年間指導計画を大まかに作成し、次年度の担当が修正を加えて達成させることができればよいとの方向性が定まった。そこで今年度は作成する教科の幅を広げ、「中学部卒業までに身に付けてほしい学習内容」等を踏まえた次年度の国語、生活単元学習の年間指導計画の作成（資料4）を行った。教科数を増やしての取組を行ったところ、国語、数学、生活単元学習の3学期までの学習内容をふまえた次年度の計画が、学年やグループで検討し作成されている。

また、今年度は、中学部の年間指導計画の様式をもとにして、全校が共通の様式での作成を目指す動きになった。様式を統一化することは、小学部、中学部、高等部の指導の連続性を意識した計画の実施に結び付いていくものと考えられる。

今後も生徒一人一人に焦点を当て、学びの連続性を深めていくために、既習の学習内容や実態把握を丁寧に行い、スモールステップでの学びを重ねるとともに、実態差に合わせた学習の幅を広げることができるよう、生活に結び付けた体験的な学習を盛り込んだ計画を目指していくことができるよう、取組を進めていきたい。

(資料1) 【国語】学習習得度確認表(部分) ※熊本大学附属特別支援学校ホームページより引用

[illegible]

(資料2) 中学部卒業までに身に付けてほしい学習内容学年一覧 (国語)

【国語】学習状況の評価と、中学部卒業までに身に付けてほしい学習内容 中学部(2)年 作成日(R.4/8/1)					
組	生徒氏名 (現在のおおよその 習得段階)	中学部卒業までに身に付けてほしい学習内容 (項目の後ろには段階を書くこと)			
		言葉の特徴や使い方・情報の扱い方・ 我が国の伝統文化	聞くこと・話すこと	書くこと	読むこと
G		普通の言葉との違いに気を付けて、丁寧な言葉を使うこと。 (中1) 点画相互の接し方や交わり方、長短や方向などに注意して文字を書くこと。(中1)	見聞きしたことや経験したこと、自分の意見やその理由について、内容の大体が伝わるように伝える順序や伝え方を考えること。(中2)		日常生活に必要な語句や文章などを読み、行動すること。(中1)
A		長音、拗音、促音、撥音、助詞の正しい読み方や書き方を覚えること。(中2) 姿勢や筆記用具の持ち方を正しくし、文字の形に注意しながら、丁寧に書くこと。(中1)	相手の話に関心をもち、自分の思いや考えを相手に伝えたり、相手の思いや考えを受け止めたこと。 (小3)	見聞きしたり、経験したりしたことについて、簡単な語句や短い文を書くこと。(小3)	日常生活に必要な語句や文、看板などを読み、必要物を選んだり行動したりすること。(小3)
A		表現したり理解するために必要な語句の量を増し、使える範囲を広げること。(中2) 点画相互の接し方や交わり方、長短や方向などに注意して文字を書くこと。(中1)	見聞きしたことや経験したこと、自分の意見やその理由について、内容の大体が伝わるように伝える順序や伝え方を考えること。(中2)	相手に伝わるように事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること。(中1)	日常生活に必要な語句や文章などを読み、行動すること。(中1)
A		表現したり理解するために必要な語句の量を増し、使える範囲を広げること。(中2) 語のまとまりに気を付けて音読すること。(中1) 姿勢や筆記用具の持ち方を正しくし、平仮名や片仮名の文字の形に注意しながら、丁寧に書くこと。(中1)		見聞きしたり、経験したりしたことについて、簡単な語句や短い文を書くこと。(小3)	日常生活でよく使われている表示などの特徴に気付く、読もうとしたり、表された意味に応じた行動をしたりすること。(小2)
B		身近な人の話し掛けや会話などの話し言葉に慣れ、言葉が、気持ちや要求を表していることを感じる。(小2) 遊びややり取りを通して、言葉による表現に親しむこと。(小2)	身近な人の話に慣れ、簡単な事柄と語句などを結び付けたり、語句などから事柄を思い浮かべたりすること。(小2)	文字に興味をもち書こうとすること。(小1)	日常生活でよく使われている表示などの特徴に気付く、読もうとしたり、表された意味に応じた行動をしたりすること。(小2)
B		身近な人との会話を通して、物の名前や動作など、いろいろな言葉の種類に触れること。(小2) 遊びを通して、言葉のもつ楽しさに触れること。(小1)	挨拶をしたり、簡単な台詞などを表現したりすること。(小2)	文字に興味をもち書こうとすること。(小1)	絵本などを見て、好きな場面を伝えたり、言葉などを模倣したりすること。(小2)
B		身近な人の話し掛けや会話などの話し言葉に慣れ、言葉が、気持ちや要求を表していることを感じる。(小2) 昔話や童謡の歌詞などの読み聞かせを聞いたり、真似したりするなどして、言葉の響きやリズムに親しむこと。(小2)	簡単な指示や説明を聞き、その指示等に応じた行動をすること。(小2) 挨拶をしたり、簡単な台詞などを表現したりすること。(小2)		日常生活でよく使われている表示などの特徴に気付く、読もうとしたり、表された意味に応じた行動をしたりすること。(小2)
B		言葉のもつ音やリズムに触れたり、言葉が表す事物やイメージに触れたりすること。(小1)	簡単な指示や説明を聞き、その指示等に応じた行動をすること。(小2) 伝えたいことを思い浮かべ、身振りや音声などで表すこと。(小1)	自分の名前や物の名前を文字で表すことができ、自分の名前や物の名前を平仮名をなぞったり書いたりすること (小2)	日常生活でよく使われている表示などの特徴に気付く、読もうとしたり、表された意味に応じた行動をしたりすること。(小2)
B		別紙参照			
B		別紙参照			
C		別紙参照			
【備考】未履修の領域・分野、検討中の気づきなど自由に					

(資料3)「障害の重い子供の目標設定ガイド」による教科目標設定の検討

令和4年8月

生徒名		参加者	谷口、小野、藤川、田井、山本よ
-----	--	-----	-----------------

(1) 学習到達度のチェックリストによる評価と、目標の手がかり

教科	まとめり	到達しているスコア	段階意義	目標とするスコア	段階意義
国語	聞くこと	8	意図の理解と共有 言葉への応答	8	言葉への応答
	話すこと	8	音声や身振りによる働きかけ	8	探索的操作
	読むこと				
	書くこと	6	物の単純な操作		
算数	数と計算	6	物の単純な操作	8	活動と結果のつながりへの気付き
	量と測定	//	//	8	探索的操作
	図形	//	//	//	//
生活		4	他者への注意と反応	6	音声や表情による対応や模倣
運動・動作					

(2) 目標・指導内容・方法シート

	まとめり	具体的な目標	指導内容・方法
国語	聞くこと	持った物を箱等に入れる。	具体物をしっかり触らせる。片手で箱を持たせ、両手を合わせるような行動を形成する。「入れる」の言葉掛けをする。
	話すこと	側にいる大人を呼ぶ。	食事の後や自立活動の後、側に近づいて次の活動の要求や反応を待つ。
	読むこと		
	書くこと	机の上の物の特徴的な部分を触って確かめる	装具や靴等、身近なものを身につけたり、活動に入ったりする前に特徴的な部分を触る機会を設ける。
算数	数と計算	提示された課題に終わるまで取り組む。	くるくるチャイム 数の決まった課題に取り組む。 終わった後に次の活動を求める反応を待つ。
	量と測定	//	//
	図形	物を入れ物や穴に狙って入れる。	スライディングブロックやくるくるチャイムに取り組む。
生活		持たされた物を3カウント把持する。	持つところから繰り返し取り組む。
運動・動作			

(資料4) 次年度の年間指導計画の試案の例					
教科等	国語B	学年	3年	担当者	
教科書等	かざることば(A) 他			配当時数	70
期	月	主な行事等	単元名	指導内容	ねらい(目標)
一 学 期	4	新入生歓迎会 授業参観	・自分の名前、友達の名前 〈読む・書く・聞く〉	・名前を呼ばれたら応答する。 ・自分の名前のカードを選ぶ。 ・友達の名前カードを対応させる。	・自分の名前の平仮名や漢字を見て同じものが分かる。 ・手本を見て同じように文字を並べる。
	5	運動会 春の遠足	・話「はやくちこぶた」 〈読む・書く・聞く〉	・話を見聞きする。 ・写真や絵、文字のカードをマッチングする。 ・場面の絵カードを順に並べる。	・身近なものの名前を知る。 ・言葉と実物や写真が一致する。 ・異同の物が分かり、対応させる。
	6	校外学習 豊浜中交流 職場見学(3) ALTとの外国語活動	・行事の作文 新入生歓迎会 運動会 豊浜中交流 校外学習 〈書く〉	・スライドや写真を通して行事を振り返り、なぞって書いたりシールを貼ったりして作文を仕上げる。 ・楽しかった活動の写真を選ぶ。	・印象に残った写真や言葉を選ぶ。 ・手元を注視して書いたり貼ったりする。
	7	水泳記録会	・1学期の思い出アルバム ・修学旅行の行程や行先を 知ろう〈聞く・書く〉	・写真を見て一緒に発音したり書いたりする。 ・しおりに書いた言葉や絵を見る。	・印象に残った写真を選ぶ。 ・しおりに書いた言葉や絵を見て、大まかな活動内容を知る。
二 学 期	9	豊浜中交流			
	10	修学旅行(3) 校外宿泊学習(2) 校外学習(1) 集中作業学習	・修学旅行の行程や行先を 知ろう〈聞く・書く〉 ・話 「おやおやおやさい」 〈読む・書く・聞く〉	・しおりに書いた言葉や絵を見る。 ・話を見聞きする。 ・写真や絵、文字のカードをマッチングする。 ・場面の絵カードを順に並べる。	・しおりに書いた言葉や絵を見て、大まかな活動内容を知る。 ・単語カードと写真カードのマッチングをする。 ・身近なものの名前を知る。 ・異同の物が分かり、対応させる。 ・教師の動きをまねて言葉を表す動作を身に付ける。
	11	学習発表会	・行事の作文 豊浜中交流 修学旅行 学習発表会 職場実習	・スライドや写真を通して行事を振り返り、なぞって書いたりシールを貼ったりして作文を仕上げる。 ・楽しかった活動の写真を選ぶ。	・印象に残った写真や言葉を選ぶ。 ・手元を注視して書いたり貼ったりする。
	12	職場体験(3) 職場見学(1・2) 高等部作業体験(3)			
三 学 期	1	ケーキプロジェクト	・2学期の思い出アルバム ・書初めをしよう 〈書く〉	・写真を見て一緒に発音したり書いたりする。 ・今年の抱負を考え、書初めをする。	・印象に残った写真を選ぶ。 ・選んだ文字をなぞる。 ・書きたい題字を選ぶ。
	2	校外学習 15分間走記録会 高等部入試(3) 卒業生を送る会	・1年間で頑張ったことや、 楽しかったことをまとめよう。	・1年間の思い出、頑張ったことを 簡単な単語で書く。 ・活動を振り返り、好きな写真を パソコン上や過去の作文から選択 する。	・思い出の文を丁寧になぞって書 いたり、行事や活動の好きな写真 を選んだりする。
	3	卒業式 修了式	・物の名前、分類(イラスト や単語カード)	・1年間で学んだ言葉について分類 する。	・手元を見て同じように文字を並 べたり、正しいカードを選択した りする。
	通 年	・名前を呼ばれたら、自分なりの方法で返事をする。 ・平仮名や漢字で書かれた名前カードを見て、自分の名前を認識していく。 ・読書活動 週1回図書室から本を借りる。集団読書に取り組む。			

(資料5) 年間指導計画作成の年間スケジュール							
1年次(第一学年)							
時期	業務内容等						
4～5月	入学						
	前年度末の試案を引継ぎ年間指導計画の作成						
	個別の指導計画作成(前半)						
夏季休業中	習得度評価と「中学部卒業までに身に付けてほしい学習内容」の選定						
	↓						
	2・3学期の年間指導計画への反映						
	個別の指導計画作成(後半)						
1月	次年度の年間指導計画試案作成						
3月	年度末評価						
2年次(第二学年)							
4～5月	前年度末の試案を引継ぎ年間指導計画の作成						
	個別の指導計画の作成(前半)						
夏季休業中	習得度評価と「中学部卒業までに身に付けてほしい学習内容」の選定						
	↓						
	2・3学期の年間指導計画への反映						
	個別の指導計画作成(後半)						
1月	次年度の年間指導計画試案作成						
3月	年度末評価						
3年次(第三学年)							
4～5月	前年度末の試案を引継ぎ年間指導計画の作成						
	個別の指導計画作成(前半)						
夏季休業中	習得度評価と「中学部卒業までに身に付けてほしい学習内容」の選定						
	↓						
	2・3学期の年間指導計画への反映						
	個別の指導計画作成(後半)						
1月	次年度の年間指導計画試案作成						
3月	年度末評価、高等部への引継ぎ						

＜ 参 考 文 献 ＞

- 特別支援学校学習指導要領解説 総則等編（小学部・中学部） 文部科学省（2018）
- 特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編（小学部・中学部） 文部科学省（2018）
- 指導内容確認表 熊本大学附属特別支援学校ホームページ
<https://www.educ.kumamoto-u.ac.jp/~futoku/ict.html>
- 障害の重い子どもの目標設定ガイド第2版－授業における「S スケールの活用」
徳永豊 編著 慶応義塾大学出版社（2021）
- 発達の高い子どもの発達理解ガイド－教科指導のための「段階意義の系統図」の活用
徳永豊・田中信利 編著 慶応義塾大学出版社（2019）
- さんすう☆☆☆ 教育出版株式会社（2022）
- 領域・教科等を合わせた指導ガイドブック 生活単元学習・作業学習の進め方 Q&A
千葉大学教育学部附属特別支援学校 編 信毎書籍印刷株式会社（2009）
- レオマワールドホームページ <https://www.newreomaworld.com>
- タオル美術館ホームページ <https://www.towelmuseum.com>
- 愛媛県総合科学博物館ホームページ <https://www.i-kahaku.jp>
- とべ動物園ホームページ <https://www.tobezoo.com>
- 「アシストガイド」アプリケーションパンフレット SoftBank
- でんじろう先生のはぴバネ <https://www.ctv.jp/hap>

＜研究推進者＞

部主事 谷口 公彦

小野久仁子	高木美智代	田井 洋之	井下眞智子	藤川 弥生
山本 健二	船橋奈生子	和田 真理	条楽 佳孝	藤岡 飛翔
浅野 拓土	藤原 隆明	大山 衣美	安藤はるな	山本 佳樹
畑中 聖子	横山 陽子			

高等部

研究テーマ

年間指導内容(計画)についての検討(3)



Ⅰ テーマについて 研究テーマ「年間指導内容(計画)についての検討(3)」

A 課程の年間指導内容(計画)について

昨年度は、「年間指導内容(計画)についての検討」をテーマに、主に A 課程¹では「3年間の各教科等の学習指導内容表」をもとに年間指導計画を作成することで、各教科の特性や指導形態を考慮しつつ、学習指導要領に示されていることを系統的に学ぶことができるよう指導内容を配置することができた。また、この研究は、3年間での学習内容の偏りや重複を避けることがねらいの一つであったが、教科によっては繰り返し学習することの有効性を示唆する研究授業や意見、教科同士で学習内容が重複している等という気付きがあった。そこで、本年度は、学習指導内容表をもとに年間指導計画を作成する際に教科担当者間で話し合いの機会を設け、指導計画の調整をして、生徒がより効率的に学習を行えるようにする。

B 課程の年間指導内容(計画)について

B・C 課程²については、生活単元学習に着目し、これまで取り組んできた学習内容の集約や整理を行った。本年度より3学年ともに、年間を通して取り組む共通単元として「おもてなしをしよう」を設定し実施する。体験的な学習を中心とした B 課程と C 課程の指導内容を検討し単元のあり方を考えるとともに、3年間の系統的な指導計画を立てる手掛かりとする。各教科の指導計画との関連を検討する。

全体を通して

上記の取組を通して「自立と確かな学びの定着を目指した授業づくり」のポイントを明らかにしつつ、日々の授業実践を行いながら、高等部の指導目標「日常生活や社会生活に必要な技能や習慣を育成する」ことの具体化を目指したい。

¹ 高等部の第1段階と第2段階の指導目標及び指導内容を学ぶことを想定した生徒の教育課程

² 一連の活動を組織的に経験することによって学習の定着が高くなると期待される生徒の教育課程

2 研究の方法

(1) 授業計画と実施

- ・全校研究のテーマである「自立と社会参加を目指した授業づくり」に沿って、学年ごとに研究授業を実施する。また、生徒の卒業後の生活を見据え、高等部の指導目標等をふまえた単元設定や指導目標、学習指導過程などを検討する。

(2) 研究授業および討議会の実施

- ・授業計画に基づいて授業実践に取り組む。研究授業後、指導案に添付した「改善シート」に意見を記入する。意見をまとめ、それをもとにして討議会を行い、単元設定や指導内容、目標の妥当性について検討する。

(3) A 課程の「3年間の学習指導内容表」の活用と改善

- ・昨年度作成した「3年間の学習指導内容表」を参考に各教科の年間指導計画を作成する。
- ・年間指導計画を作成する時に、重複する内容について機会を設けて話し合う。
- ・重複した内容や実際に授業を進めていくなかでの効果や課題についてアンケート等を利用して意見を集約する。
- ・令和5年度以降の年間指導計画のための資料「3年間の学習指導内容表改訂版」を作成する。教務部から提案される年間指導計画との関連、今後の運用について検討する。

(4) B 課程と C 課程の年間指導内容や年間指導計画についての検討

- ・生活単元学習の単元の一つに3学年共通の単元として「おもてなしをしよう」を計画する。
- ・単元は2期に分け、2学期末に3学年合同で「せいぶまつり」を行う。
- ・3学期は、「せいぶまつり」で得た課題を基に各学年で「おもてなし」を計画する。
- ・授業を進めていくなかで効果や課題についてアンケートなどを利用して意見をまとめる。
- ・「せいぶまつり」は、3年間で指導する計画とし、学年毎の指導内容を明確にする。
- ・各教科の指導計画との関連についても合わせて検討する。

3 実践

(1) 第1・2・3学年2組 保健体育

① 単元名 ボッチャ

② 生徒の実態

本グループは、高等部B課程の1年生、2年生、3年生の男子4名、女子7名の計11名で構成され、ほとんどの生徒は意欲的に取り組んでいる。一方で、情緒が不安定で、他の生徒と一緒に活動できない時間がある生徒や、教師の支援、補助や言葉掛けが必要な生徒もいる。ボッチャについては、全員の生徒がこれまでに取り組んだことがあり、的を目掛けてボールを投げたり、得点を競うことを楽しんだりする生徒が多く、活動に活発に取り組むことができている。

③ 単元設定の理由と主なねらい

ボッチャは、本来肢体不自由者のために考案されたスポーツでパラリンピック正式種目である。2チームに分かれ、ジャックボールと呼ばれる目標球にどれだけ近くボールを投げられるかを競う競技である。また、投げ方に決まりはなく、ボールを投げるのが難しい競技者には、ランプという滑り台のような補助具の使用が認められているなど、誰もが楽しむことのできるスポーツである。本単元では、個人戦やチーム対抗戦でのボッチャを設定した。個人戦では、一人一人の記録に注目し、友達と競いながら、目標物を狙ってボールを投げたり転がしたりする技術を向上させることを大切にしたい。またチーム対抗戦では、集団の雰囲気を感じて友達を応援したり一緒に喜んだり、また、状況に合った言葉掛けをしたりしながら友達と力を合わせて戦う楽しさを経験することができるようにした。ボッチャを通して、ルールを守りながら3学年の生徒と一緒に活動する機会をつくることで、共に学習する友達や教師との関わりの輪が広がると考え、本単元を設定した。

主なねらい

- ・目標物を狙ってボールを投げる。
- ・高得点を取れる目標物を考えることができる。
- ・他の生徒がボールを投げているときに応援をする。

④ 実際の授業の様子

生徒が狙う目標物をよく見て、ボールを投げるようになった。目標物には、生徒が興味のある写真を貼ることで、よく見ることができるようになった。効果音や点数の掛け声を用意することで、良い雰囲気での授業を展開することができた。また、一人一人が注目を浴びながら楽しく活動に参加でき、ボッチャという競技に慣れ親しむ取り組みができたのではないかと考える。

⑤ まとめ(成果と課題)

今回の授業は、ボッチャ本来の試合の前段階として、的を用いた授業を展開した。また、ジャックボールを狙う前段階として、シャトルケースを用いた目標物を準備した。目標物には生徒の興味のあるものの写真を貼ると、生徒が目標物をよく見てボールを投げるようになった。また、授業の流れや片付けの役割分担を写真等で可視化することで、分かりやすく伝えることができた。一方で、より個人の実態に合わせてボールを工夫していく必要があった。また、T3 がゲーム時に投球撮影をしたが、今後は定点カメラを使用し、よりスムーズに授業ができるようにしていきたい。本時の授業での学びを生かして、本来のボッチャにより近付けられるように、次時以降ジャックボールや本来のコートを用いたボッチャを取り入れていきたい。

(2)第2学年2組 生活単元学習

① 単元名 おもてなしをしよう～せいぶまつり～

② 生徒の実態

本学級は、男子2名女子3名によって構成されている。日常生活で使用する簡単な漢字が読み書きでき、言葉でコミュニケーションをとれる者から、伝えたいことはあるが、発声のみで言葉にならず、コミュニケーションがうまくとれない者まで実態は様々である。祭りについては、全員、興味・関心が強く、地域の祭りに参加した経験がある。特にちょうさ祭りが好きで、休み時間にはちょうさ祭りの動画を見て過ごすこともしばしばある。

③ 単元設定の理由と主なねらい

秋祭りは、豊作や豊漁を神や自然に感謝する行事であり、私たちが最も身近に接することができる伝統文化である。また、地域ごとに行われることから、地域交流の場としても重要な役割をもっている。西讃地区では、年中行事の一つとして祭りが根付いており、生徒の中には、毎年祭りを楽しみにしている者もいる。近年では、新型コロナウイルス感染症の影響により、多くの地域で祭りが中止となっている。しかし今年度は、数年ぶりに祭りが開催される地域が多く、生徒たちも楽しみにしている。本単元では、模擬屋台の出店や接客、祭りの運営をして、祭りの文化や魅力を学び、地元だけでなく四国地方の大きな祭りについて知ること、祭りの持つ意味や価値についてふれるようにする。さらに、屋台の準備や祭りの模擬体験を通して、学級の団結やコミュニケーション能力の向上を図ることができると考える。そして、自分たちが屋台の店員になって、教師や他学年の生徒におもてなしをすることで、日頃の感謝の気持ちを伝えたり、自己肯定感を高めたりすることができると考え、本単元を設定した。

主なねらい

- ・作業内容を理解して、制作に取り組む。
- ・好きな色や形を自分で選択する。
- ・屋台の準備や制作に積極的に取り組む。
- ・祭り当日、自分の役割を全うする。

④ 実際の授業の様子

生徒たちにとって興味・関心の高い題材でもあり、意欲的に最後まで集中して、活動に取り組むことができた。法被を着たり、祭りの音楽を流したりすることで、祭りの雰囲気を感じながら楽しく取り組めた。屋台の準備では、一つ一つの工程を全員で一緒に進めた。「早くできたら待つ。」というルールを守って、静かに待つことができた。また、魚の制作工程の動画をテレビ画面に繰り返し映し出すことで、よく見て制作することができた。

⑤ まとめ(成果と課題)

動画視聴や制作工程の手本映像、タイマー、ゲームの順番決めのルーレットなど、各場面で ICT 機器を有効活用でき、生徒の活動意欲を引き出すことができた。一人一人の課題に応じて、目標を設定し、魚釣りゲームの作成に取り組むことができた。また、全員で同じスピードで工程を進めることで、「全員で一緒に」という集団としての意識が高まったように感じた。魚釣りゲームの体験で、一人の生徒が一匹も釣ることができないことがあった。生徒の実態に応じて時間の設定やさおの形を変えて釣りやすくするなどの工夫があればよかった。

(3)第3学年1組 職業科

① 単元名 卒業後の働く生活を支える社会の仕組み

② 生徒の実態

本学級は男子6名、女子3名の企業就労や福祉的就労を希望する9名で構成されている。

生徒は1年次より週2時間の職業の授業の中で、勤労の意義や作業に向かう姿勢やコミュニケーションなどについて学習し考えるとともに、掃除、軽作業などの作業課題に取り組むなど実践的な学習活動を積み重ねてきた。また、校内実習で作業の持続性や確実性を高めたり、現場実習を通して卒業後の職業生活に必要な資質について理解を深め、課題について考えたりしてきた。作業内容の質や取り組む姿勢が高まってきた一方で、卒業後の生活について具体的に考えることは難しい者もいる。

③ 単元設定の理由と主なねらい

卒業後、生徒は仕事や生活の様々な悩みと向き合うことになることが予想される。困ったことが生じた際に相談できる人や場所、障害福祉サービス等を、自ら選び、実際に相談したり利用したりすることができるようになることが必要であるだろう。そこで、生徒が、卒業後の生活において、より良い職業生活を送るために必要な公的支援機関の知識を身に付けるとともに、課題解決を図る力や、生活を改善しようとする態度を育てることをねらいとして、本単元を設定した。

主なねらい

- ・雇用に関する各種援助や障害福祉サービスの内容とその利用方法について理解する。
- ・社会生活で利用できる公共の施設や余暇活動として利用できる地域資源とその利用方法について理解を深める。
- ・卒業後の社会生活で、利用できる支援やサービスがあることに気付く。
- ・学習を通して理解したことや考えたことについて表現する。
- ・各種援助制度や相談先に関心を持ち、学習に主体的に取り組む。
- ・学習内容を自分の将来と照らし合わせながら、自分のこととして考える。

④ 実際の授業の様子

タブレット端末を使っの「自分つながりマップ」の作成では、前時までの学習内容やこれまでの調べ学習の経験、ローマ字入力のヒント等を手掛かりにして、各自がタブレット端末を使用して必要な情報を調べながらマップを作成することができた。「もしものときにどのように対応するか」について考えて発表する活動では、想像することが難しい生徒も、イラストや教師の言葉掛けを参考にすることで、自分の考えを紙に書いた後、友達に発表して伝えることができた。

⑤ まとめ（成果と課題）

スライドを画面に表示しながら授業を進めることで、聞くだけでは分かりにくい生徒も文字を見て活動の内容を理解して取り組むことができた。また、企業就労を希望する生徒が事後の授業で取り組んだ関係機関の訪問では、ハローワークや障害者就労・生活支援センターの方に「就職した後に困ったことができたなら相談しに来て良いですか。」「生活面の支援とはどのようなことをしてくれるのですか。」などと自分で考えた質問を全員が積極的にすることができた。福祉的就労を希望する生徒は卒業後お世話になる「相談支援専門員」の存在を意識するきっかけの単元となった。生徒が自分で考えたりまとめたりする時間が十分とれるような時間配分をすることや、生徒の実体験に基づいた事例を示すことが今後の課題である。今後も、生徒が将来の生活の中で、習得した知識を活用しながら課題解決を図ったり生活を工夫したりできるように、指導内容や系統性をよく考えて年間指導計画を作成するようにしたい。

4 まとめ

本年度、高等部では全校研究テーマ「自立と社会参加を目指した授業づくり」をもとに授業研究を進めてきた。また「年間指導内容（計画）についての検討(3)」を高等部テーマとし、「3年間の各教科等の学習指導内容表」の活用と改善に取り組んだ。また、B 課程の生活単元学習の指導内容や年間指導計画についても検討した。

○研究授業の実施

1年 保健体育

研究授業では、生徒が興味・関心をもち主体的に学習に取り組めるように、ボッチャのルールを簡易化した学習に取り組んだ。狙いが定めやすいように、生徒の興味が高い写真を的にすることで狙うという意識を高め、本来のボッチャに近い活動に取り組めた。ボッチャの学習を通してルールやボールを投げるといった体の調整能力を高めることもできた。また、活動内容をカードで示し視覚化することで、生徒が主体的に行動できた。

2年 生単

研究授業では、せいぶまつりに向けて「おもてなし」の準備をするために魚釣りゲームを行った。作業工程を、テレビ画面に繰り返し映すことで生徒が自分で作業内容を確認しながら主体的に取り組むことができた。また、完成した魚を使って実際にゲームを行うことでゲームの楽しさを体験し、おもてなしを行うせいぶまつりに向けて活動意欲を高めることができた。

3年 職業

研究授業では、卒業後の働く生活を支える仕組みとして、「自分つながりマップ」を作ることに取り組んだ。一人一台のタブレット端末を用いて「自分つながりマップ」に必要な情報を調べながら作成することで、主体的に取り組むことができた。また、まとめた内容がハローワークや障害者就労・生活支援センター訪問時の質問に生かされた。討議会では、「自分つながりマップ」の内容が移行支援計画につながればよいと話題が上がった。生徒自身が将来について考え、学んでいける機会となった。

3本の研究授業に共通する「自立と社会参加を目指した授業づくり」のポイントは次の3点である。

- ①生徒の興味・関心のある教材(題材)設定
- ②見通しをもって取り組むことができる活動
- ③実生活に関連付けた指導

生徒の実態や課題は様々であるが教科の目標を実現できる①教材(題材)を設定②生徒が見通しをもって取り組むことができるように活動を計画的に配置することで、対話的で深い学びにつながると考える。また、ICT 機器を生徒の実態に応じて取り入れることは、主体的な学びにつながったと考えられる。

さらに、学習したことを実生活のなかで生かす機会を作ることで、社会参加の視点を取り入れた授業となるのではないかと考える。教科の特性によって具体的な支援方法は異なってくると考えるが、今回の研究で確認されたポイントを生かしながら、今後、多くの教科で、実践を行うなかで、自立と社会参加を目指した支援のポイントをさらに具体化していきたい。

○A 課程の「3年間の各教科等の学習指導内容表」の活用と改善

年度初めに年間指導計画を立てる際に、教科間で打ち合わせをする機会を設けることで、昨年度の検討課題であった他教科と指導内容の調整をする機会を設けた。その後アンケートを実施し以下のような意見を得られた。

<効果>

- ・年間指導計画が立てやすかった。
- ・ねらいを確認しながら学習計画を立てることができた。
- ・指導内容が重複しないように学習できた。また、定着を図りたい学習では繰り返し学習することができた。

指導内容表をもとに年間指導計画を立てる際に話し合いを行うことで、指導内容の精選、目的の明確化、効率化が行われ、指導内容が重複する場合は、学年や生徒の状況に応じて指導内容を組むことができより生徒の実態に応じた指導が行えた。

また、「3年間の各教科等の学習指導内容表」を今後使用していくにあたり、学習指導内容表の改訂をどの程度の期間で行っていくか調査を行った結果、毎年または3年ごとに内容の見直しや改訂を希望する意見があった。今後、更新時期の調整を行いたい。アンケートのなかで「3年間の各教科等の学習指導内容表」の使用にあたって毎年指導した内容を引き継ぐ必要性があるとの意見もあった。対応策として、既習内容の欄を色付けするなど申し送り時に扱った学習内容が見てわかるようにしてはどうかと考える。

これらのことから、今年度の取組の成果として、学習指導内容表を利用することで具体的な授業内容を検討する際の助けになったことが分かった。また、他教科や教科等を合わせた指導との指導内容の調整についても検討するよい機会となっていた。一方で、次年度への引継ぎ内容と方法について、今後検討していく必要がある。

検討課題はあるが、学習指導内容表を参考にすることで指導内容を明確化するとともに指導計画を立てる際に生徒の実態に応じた指導内容、段階の選定など3年間を見通したつながりのある学びを行っていく一助となると考える。

※今年度使用した「3年間の学習指導内容表」を資料として示す。(資料1 保体、資料2 数学)

OB 課程の年間指導内容や年間指導計画についての検討

昨年度検討し単元設定した「おもてなしをしよう」の授業実践を行い、指導内容及び指導計画について検討した。実施する際の考慮する観点、ねらいは以下の通りである。

●観点

- ・生徒の興味・高等部の指導目標³を踏まえる。
- ・地域の特徴や季節、興味・関心に合わせ、生徒が主体的に活動できる内容とする。
- ・国語や数学などの他教科との関連性について考慮する。
- ・曜日によって担当教員が変わっても、生徒の学習がつながり、積み重なるようにする。

●単元のねらい

- ・模擬店やちょうさ祭りで用いる太鼓台体験、謝恩会の準備や運営において、自分たちが希望する活動を選択し、活動に応じた役割を果たす。
- ・場に応じたやり取りや、相手に伝わる伝え方をする。
- ・友人や教師と協力して最後までやり遂げようとすることで達成感を味わう。
- ・相手をもてなすことで人に喜ばれる経験を重ね、自己肯定感を高める。

これらの観点、ねらいを考慮しながら生徒の実態や新型コロナウイルス感染症防止の観点などさまざまな状況に応じて柔軟に学習を計画し実施した。日程に関しては、せいぶまつりとして12月に実施した。そこでの課題をふまえて、謝恩会やおもてなし会を3月に学級ごとに設定し実施することとなった。2学期中の秋祭りは問題なく行えたが、3学期の「おもてなし」は、日程調整が難しく各学年での対応となり次年度の開催時期、方法については検討する必要がある。また、せいぶまつり後に実施したアンケート結果は以下の通りである。

<よかった点>

- ・一つの目的に向けて学習や準備をすることができた。
- ・発達段階に幅があっても取り組みやすかった。
- ・生活単元学習で学習する内容を考えることがスムーズにできた。

<課題と対応策>

- ・日程、参加者を早めに調整して欲しい。
→実施時期や参加人数などを調整する機会を設ける。
- ・教科との連携が難しい。教科の内容との関連性をどのようにもつか課題と感じた。
→年間の指導計画を立てる際に、教科間で打合せをする機会を設ける。
- ・計画の段階で誰におもてなしをするかしっかりと分かっていたら準備がやりやすかった。
→次年度以降、どのような形で行うのかを検討する。

³ 日常生活や社会生活に必要な技能や習慣を育成する

(1) 目的が達成しやすいように段階的な指導を行い、自発的・自主的な活動を大切にして、主体的活動を促すような指導方法を工夫する。

(2) 生徒一人一人が集団において役割が得られるように工夫して、その活動を遂行できるような指導に努める。

今回の取組において、アンケート結果から年間を通して軸になる単元を設定することで、計画的な指導が行えるようになったことがうかがえる。祭りの実施においては、初めての開催となり日程の調整、催し物の決定など他学年と協力しながら進めることができた。しかし、3年間を見通した共通単元であることを考えると、今後学年ごとの目標や指導内容の精選、行事としての位置付けやそのための調整役となる教員の配置など課題は多い。また、今年度のねらいは、「知識及び技能」「思考力や、判断力、表現力等」の観点において評価の基準が定められておらず、関わった教員の主観による評価にとどまっている。さらにどの教科の指導内容であるかも明らかにされていない。

生活単元学習の指導は、本来教科指導が難しい場合に教科の指導内容を生徒の実態に応じて教科の全部又は一部を合わせて指導するものである。今年度は、行事単元として、各学年の「おもてなし」の内容を役割分担した後は、それぞれの学年がどのような内容を組み入れるか手探りの状態でやってきたのが現状である。今後は、生活単元学習の指導計画にも教科の目標、内容を明記していく必要がある。教科の内容をどのように組み入れていくか精査し、必要な場合は、教科で指導する等教員が明確な目標をもって指導を行うことで、前述したねらいの達成につながると考える。

(資料1) 数学 使用教科書（くらしに役立つ数学）													
学期		1					2				3		
月		4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3	
1年		A 数と計算					B 図形				D データの活用		
	1	・整数の表し方／十進法、万・億・兆 ・整数及び小数の表し方／十進法、小数点の移動に伴う数の変化 ・概数／概数が用いられる場面、四捨五入、四則計算の結果の見積もり ・整数及び加法及び減法／3位数や4位数の加法及び減法					・平面図形／平行四辺形、ひし形、台形、図形の形や大きさが決まる要素、円、円周率 ・立体図形／立方体、直方体、直線や平面の平衡や垂直の関係、見取り図、展開図、基本的な角柱や円柱 ・ものの位置／平面上や空間の位置の数学的な表現の仕方 ・縮図や拡大図／縮図、拡大図、対象な図形				・データの収集とその分析／円グラフ、帯グラフ		
	2	・整数の性質／奇数偶数、約数、倍数									・データの収集とその分析／代表値、度数分布、柱状グラフ		
	通年	〈例〉A 数と計算（プリント学習） ・整数の乗法／2位数や3位数に1位数や2位数をかける乗法、乗法の性質 ・整数の除法／除数が1位数や2位数で被除数が2位数や3位数の除法、除法の性質											
2年		A 数と計算					B 図形				C 変化と関係		
	1	・小数の計算／小数の仕組み、整数と同じ原理での計算 ・小数の乗法と除法／整数と同じ方法での計算 ・分数とその計算／分数の表し方、意味、単位分数、真分数、仮分数、帯分数、同分母で和が1までの真分数同士の加法、減法					・平面図形の面積／三角形、平行四辺形、ひし形、台形、面積を求める公式 ・概形やおよその面積／身の回りにおける形の概形やおよその面積 ・円の面積／求め方の公式、円周率 ・体積／体積の単位（cm ³ 、m ³ ）、角柱及び円柱の体積				・伴って変わる二つの量の割合として捉えられる数量／単位量当たりの大きさの意味及び表し方 ・伴って変わる二つの数量／比例の関係、反比例の関係		
	2	・分数／分数の意味、通分 ・分数の加法、減法／異分母の分数の加法及び減法 ・分数の乗法、除法／整数と同じ法則が成り立つこと、計算											
	通年	〈例〉A 数と計算（プリント学習） ・小数の乗法と除法 ・分数の乗法と除法											
3年		C 変化と関係					A 数と計算				D データの活用		
	1	・二つの数量の関係／割合、百分率					・数量の関係を表す式／四則の混合した式、（ ）を用いた□や△などの記号を用いた式 ・計算に関して成り立つ性質／交換法則、分配法則、結合法則 ・数量の関係を表す式／aやxなどの文字を用いて数量の関係や法則を表現する。文字に数を当てはめて調べる。				・測定した結果を平均する方法／平均 ・起こりうる場合／起こりうる場合の分類整理		
	2	・二つの数量の関係／比の意味や比の表し方											
	通年	A 数と計算（プリント学習） ・数量の関係を表す式／四則の混合した式、（ ）を用いた□や△などの記号を用いた式 B 図形 ・平面図形の面積／三角形、平行四辺形、ひし形、台形											

(資料2) 保健体育 使用教科書 (暮らしに役立つ保健体育)											
学期	1					2					3
	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3
1年	A 体づくり運動 ・体ほぐしの運動 ラジオ体操 ストレッチ 新体力テスト 走ったり飛んだりする運動 ※運動会練習	D 水泳 ・水泳 クロール 平泳ぎ	F 武道 ・武道 柔道 剣道	I 保健 ・心身の発育・発達 心身の機能の発達に関すること ストレスへの対処	A 体づくり運動 ・体の動きを高める運動 ・動きを継続する動きなどを高める運動 ラジオ体操 ストレッチ 新体力テスト 走ったり飛んだりする運動	B 器械運動 ・器械運動 マット運動 平均台運動	C 陸上競技 ・陸上競技 短距離走・リレー 長距離走 ※マラソン大会練習	C 陸上競技・陸上競技 長距離走 ※マラソン大会練習	E 球技 ・球技 ゴール型 (バスケットボール・サッカー) ネット型 (ソフトバレーボール・バドミントン・卓球) ベースボール型 (ソフトボール・ティボール) その他 (フライングディスク・ポッチャ)	I 保健 ・傷害の防止及び疾病の予防 怪我や疾病の予防 交通事故や自然災害などへの備と対応 ・健康安全に関わる自他の課題	
2年											
3年											
	・「A 体づくり運動」を中心とした準備運動は通年で、毎時間行う。 ・「H 体育理論」については、授業を通して、それぞれの競技の特性に合わせて実施する。 ※H 体育理論 ・運動やスポーツの多様性 ・運動やスポーツの効果と学び方 ・運動やスポーツの安全な行い方 ・文化としてのスポーツの意義 ・それぞれの項目から3年間で重複や偏りがないように内容を選択する。										

<参考文献>

- 特別支援学校高等部学習指導要領解説 知的障害者教科等編(上)(高等部) 文部科学省 (2020)
- 特別支援学校高等部学習指導要領解説 知的障害者教科等編(下)(高等部) 文部科学省 (2020)
- 特別支援学校高等部学習指導要領解説 各教科等編(小学部・中学部) 文部科学省 (2018)
- 特別支援教育研究論文集-平成27年度特別新教育助成授業-
公益財団法人みずほ教育福祉財団(2009)

<研究推進者>

部主事 宮崎 令子

佐伯 卓哉	藤田 彰一	塩田 久美	川崎 美穂
安藤 久富	松岡 真澄	安藤 恵子	三好 史恵
前川 宗正	中川 有紀子	大西 恭子	武藤 健太郎
渡辺 倫己	田尾 沙織	森田 玲衣	近藤 美輝
佐治 建太	関 菜都美	筒井 雅幸	豊浦 生江
前川 砂織	渡邊 妙	登 義治	瀬尾 友樹
山口 和幸			

全校研究テーマ「自立と確かな学びの定着を目指した授業づくり」の下での校内研究を振り返って

小学部では、昨年度からの研究を発展させ、体育科に焦点を絞って「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した研究を進めた。これまで取り組んできた研究の成果を踏まえながら、授業改善の三つの視点で授業を振り返り、グループ協議を重ねてきた。協議の内容は次の授業に確実に生かされ、その学年だけでなく小学部全体の授業改善につなげることができた。また、体の使い方が苦手な児童に対して有効な運動、肢体不自由を併せ有する児童や重度知的障害を有する児童へのアプローチなど、体育科の指導の幅を広げることができたと考える。

中学部では、これまでの学びの連続性や学習内容の幅広さ、今と将来の生活へのつながりなどを踏まえたより良い学習につながるよう、学習習得度調査を行った。実態を把握し、共通理解が深まることで、指導内容を選定する際には、より実態に即した幅広い内容を学習できるようにねらいが明確になった。また、主な行事や指導内容、ねらいなどの項目を含む様式を使用して年間指導計画の引継案を前年度に立てることで、効率よく計画を作成できるようになった。研究授業や授業後の討議会では、幅広い実態差のある集団での学びを深め、幅をもたせる方法等の取り組み方への方向性も確認できた。

高等部では、学習指導内容表を利用して具体的な指導内容を検討した。指導内容を明確化するとともに、生徒の実態に応じた指導計画を立てるための手掛かりとすることができた。また、B 課程と C 課程の生活単元学習では、年間を通して取り組む共通単元として「おもてなしをしよう」を設定した。この単位を通して B 課程と C 課程の生徒が「何を学ぶか」を検討することで、生活単元学習と各教科との関連を考えたり、3 年間の系統的な指導計画を立てたりするための一助となった。

学校における働き方改革が叫ばれている昨今、研究授業の回数を減らすことで教員の負担の軽減を図っている学校も少なくない。本校では、各学年 1 回、年間 12 回の研究授業を校内研究の中心に据えている。働き方改革の目的には、業務内容の整理の他に、教職人生を豊かにすることで自らの人間性や創造性を高め、児童生徒に対して効果的な教育活動を行うことができるようになることであるという視点が含まれる。「教職人生を豊かにする」とは、目まぐるしく変化し続ける時代の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて学び続けながら自らの教員としての資質・能力を向上させていくことではないかとの考えから、研究授業の取組を継続してきている。研究授業は、研究テーマに沿った授業を全ての教員が授業改善の視点をもって参観し、討議会で意見を交わし合い、また日々の指導に発展させて生かすことができるという、教員にとっての「主体的・対話的で深い学び」であると考え。とはいえ、担当者として研究授業に重きを置き過ぎるあまりに教員の負担感や多忙感が増すことのないように配慮していきたい。

この「自立と確かな学びの定着を目指した授業づくり」という全校研究テーマは 2 年目であるが、各部の研究テーマの下に、研究授業を通して自立とは何か、確かな学びの定着とはどういうことなのかについて、全員で研究を進めることができた。また、研究成果には、それぞれの部の独自性を反映しながらも互いに参考にできる取組であった。次年度以降は、全校研究テーマと各部のテーマにより密接な関連をもたせることで、学びの連続性を意識した研究を進めていきたい。

編集後記

今年度も新型コロナウイルス感染症の感染拡大に影響を受けた年になりました。対面で予定されていた PTA 総会と授業参観が直前で感染拡大による学部閉鎖で中止になったり、修学旅行がやむなく変更を強いられたりしました。ただ、新型コロナウイルス感染症の感染拡大から3年が経ち、感染拡大予防、抑制のために学校を閉鎖して学習活動を犠牲にするのではなく、いわゆる「ウィズコロナ」で感染対策は講じながら、なるべく通常の学習活動や学習経験の機会を確保し、教育水準を低下させることなく維持、向上させることに主眼を置いた1年でもありました。

そんな中で、令和元年12月に文部科学省より発表された「GIGAスクール構想」は5年間かけて順次ICTのハード環境を整備する予定でしたが、新型コロナウイルス感染の拡大を受けて、オンラインを活用した授業や学習への必要性が高まったことから、端末導入のスケジュールを大幅に前倒して整備が行われました。令和3年度より小・中学部の児童生徒には1人1台、高等部の生徒には3人に1台の割合でタブレット端末が支給されたり、高速大容量回線を使用した校内ネットワークが整備されたりしました。今年度末には高等部生徒に1人1台タブレット端末が配置され、教職員にもほぼ全職員に配置される予定になっています。オンラインを活用した学校と家庭を結んだ学習活動は、まだまだ課題が多く進んでいるとはいえませんが、校内の学習状況は大きく変わりました。

研究授業等でも、ICT 機器を活用しない授業はほとんど見られないほどで、情報の収集能力について視覚優位な児童生徒が多く在籍する本校にとっては、ICT 機器を用いた学習は児童生徒に興味関心をもたせ、学びの幅と深みを与え、授業の質を格段に向上させる素晴らしいツールになりました。コロナによって早めにもたらされた数少ない財産の一つといえるかもしれません。

今年度も、昨年に引き続き「自立と確かな学びの定着を目指した授業づくり」の全校研究テーマのもと、各部が研究テーマを設定し、全職員が研究や授業に取り組みました。

それぞれの部の取組と成果は、カリキュラムマネジメントの「教師が複数の教科等の連携を図りながら授業をつくる」と「学校教育の効果を常に検証して改善する」ものであり、加えて学校評議委員会をはじめとする地域との連携により、よりよい学校教育を目指し、社会に開かれた教育課程の実現に向けて確かな歩みを進めていくものであると確信しています。

研究集録「ひとりひとりをみつめて 44集」は児童生徒の自立と確かな学びの定着を目指した本校の取組をまとめたものです。ご一読いただき、本校の取組にについてご指導、ご助言いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、本年度の研究についてご指導いただきました、香川大学教育学部教授 坂井 聡先生をはじめ、関係の皆様方には厚く感謝申し上げます。

教頭 香川 昌久

